

第Ⅲ章 北和城南古墳出土品の調査

1 鏡

青銅鏡は4面が存在する。以下、それぞれの資料について台帳の記載順に観察所見を述べる。あわせて先行研究における位置づけについても確認する。鏡式名については、台帳の名称と記述に際して使用する名称の異なるものがあるため、個々の資料報告の冒頭において併記する。

裁1 半円方形帯四乳龍鏡 龍鏡

いわゆる龍鏡である。主像文様として、1つの頭部に2つの胴部のともなう事例が目立つことから、「単頭双胴怪獣倭鏡」[田中1979]あるいは「単頭双胴神鏡」[森下1991]とも呼称される。いっぽうで、共通した主像文様の構図をほぼ踏襲しながらも、胴部が2つではなく1つしか付属しない例があり、当該資料はこの胴部が単一の事例にあたる。

現 状 縁部から内区方向へ長さ8cmほどにおよぶ大きな1本の亀裂が入り、この亀裂を境界に鏡体が反るように歪んだ状態となっている。さらに、大きな亀裂と歪みにともなって細かな亀裂が発生している。全体として、遺存状態はきわめて悪い。保存処理は実施されていない。

付着物として、鏡背面を覆うように布が全面にわたってみとめられる。鏡背面の布には、目の精粗により2種類を指摘できる。目の細かい布が全体に広く付着し、もっとも多いところでは折り重なって5重にもおよぶ。さらに、目の細かい布の上に、部分的ではあるが目の粗い布が付着する。目の細かい布は縁部外斜面にもみられ、一部鏡面側にもおよぶ。鏡面に付着する布は縁部付近では部分的ながらも比較的明瞭に観察しうるが、大部分は断片的であり、付着状態も良好ではない。鏡背面とは異なって、鏡面のほとんどは薄い錆によって覆われている。鏡面の錆の状態は一様ではなく、ほかの部分と異なる直径13～14cmほどのおおむね円形の範囲が全体の4分の1程度にわたってみとめられる。ほかの遺物と接した状態であった可能性を反映するものと考えられる。

色調は、布が付着している範囲はやや濃い色調の緑色をおおむね呈し、薄い錆に覆われた部分は淡い緑色ないしはやや赤みの帯びた褐色に近いものとなる。やや赤味のさした色調については赤色顔料の付着による影響を完全には否定できないが、明らかな赤色顔料の付着はみとめがたい。鏡背面ならびに鏡面ともに、本来の表面状態を確認できる部分は存在しない。

法 量 鏡体に歪みが生じており、正確な法量を提示することは困難である。もっとも歪みの小さい部分で直径は24.1cmである。厚さは内区で2.0mm程度、外区で約2.5mm、縁端部で約8～9mmである。鏡面の反りは明らかにしがたいが、2～3mm程度になるものと考ええる。重量は現状で1152.9gである。

構 成 中心には半球形の鈕があり、界圈によって内区主文部と内区副文部に分ける。内区主文部には、主文様帯とその外側に外周文様帯がある。内区の外側には、内区より一段高い外区がめぐる。

1 鏡

鈕 直径3.0cmに対して、鏡背面からの高さが1.4cmほどの整った形の鈕である。上面は丸く仕上げられ、断面形態は半円形となる。直径3.3cm、高さ1mmほどの円座にのる。円座の外周には、節のない重弧文のみからなる幅約3.5mm、高さ約1.5～2.0mmの断面蒲鋒形の鈕座がめぐる。鈕孔は長方形を呈し、鈕孔下辺が円座の上面と一致する。孔付近の面取りの状況など細部については、付着物により確認できない。鈕孔は一方の上辺が約1.1cm、下辺が約1.0cm、高さが約6mmであり、もう一方が幅約1.0cm、高さ約6mmとわずかな大きさの違いがある。多くのほかの事例を参考にすれば、同一個体における鈕孔の大小は、湯周り不良の有無と関連づけうる。鈕孔が若干ながらも大きくなった一方には、湯周り不良の影響を想定しておきたい。なお、鈕孔の開口方向と鏡背面の文様構成との対応関係をみると、鈕孔は乳を結んだ延長線上に位置する。

内 区 内区主文部は幅約4.3cmであり、文様帯のほぼ中央に位置する4つの乳によって区画される。乳は直径が約9～10mm、鏡背面からの高さ約7～8mmとやや大きい。先端は尖り気味であり、斜面は若干のふくらみをもつ。乳には、直径約1.2cmの円圈が乳座としてめぐる。

乳による各区画には、比較的共通した単位文様をそれぞれに置く。単位文様を反復することを原則とするが、その表現方法には区画ごとで若干の変異がある。いずれの区画においても、3体の主像が配置される点は共通する。3体の主像には、それぞれ獣面様の頭部がともなう。頭部は、眼を珠点であらわし、眉の細線が眼の下方を囲み、鼻梁の頭部側が二叉になるものである。口の表現はみられない。区画の中央に位置する主像は、胴部をC字状に大きく曲げた表現をもち、もともと立体的にあらわされる。胴部には中央に鱗を珠文によってあらわし、両端は羽毛を突線によって表現する。頭部と胴部が接続せず、分離した状態となっている。そのためか区画によっては、胴部のみが存在し、頭部が省略される場合もある。さらに、やや小さめの表現の逆S字状に屈曲した胴部をもつ主像がある。細部については不明であるが、胴部は弱いふくらみをなし、ふくらみには突線が配されるようである。頭部と胴部が分離せず、胴部の肩に相当する部分に大きく広げた両腕があり、その先端にそれぞれ手が表現される。この主像は、先述のC字状の胴部をもつ主像の向かって左側に配置されるのを基本とするようであるが、1区画においてのみ右側に配置される。さらに、もう1体の主像は、顔面とともに非常に弱いふくらみの胴部をもつ。区画によっては、明瞭な胴部が存在しないところもある。顔面の下には維綱に由来する棒状の文様がみられる。このもともと小さく表現された主像は、C字状の胴部をもつ主像の向かって左側に位置する。これらの主像の間隙間には、突線によって表現された弧状あるいは渦巻状の文様がほどこされる。また、界圏近くには12個のフジツボ状の小突起がある。小突起には、斜面に突線による施文がほどこされ、基部に房状の文様がとりつく。

主文部の外側に位置する外周文様帯には、内外に2条の圈線をともなった文様をめぐらす。内区外周文様帯の幅は1.4cm程度であり、8個の半円と8個の方格を交互に配することで文様帯を16区分し、それぞれの区画内を珠文で充填する。珠文は同心円状に3重に整然と配列される。半円は横幅約1.2cm、縦幅約7mmであり、突線を半円形にめぐらしたものである。半円のなかには突線による渦文を2個置く。方格は横幅約7mm、縦幅約7mmであり、突線でコの字状にあらわし、内部に4mm角程度の突線表現の方形文を1つ入れる。半円と方格ともに浮彫りではなく細線で表現する点が特徴的である。

内区外周文様帯の外には界圏をめぐらし、副文部とを区画する。界圏は内斜面の高い位置に一条の円圈

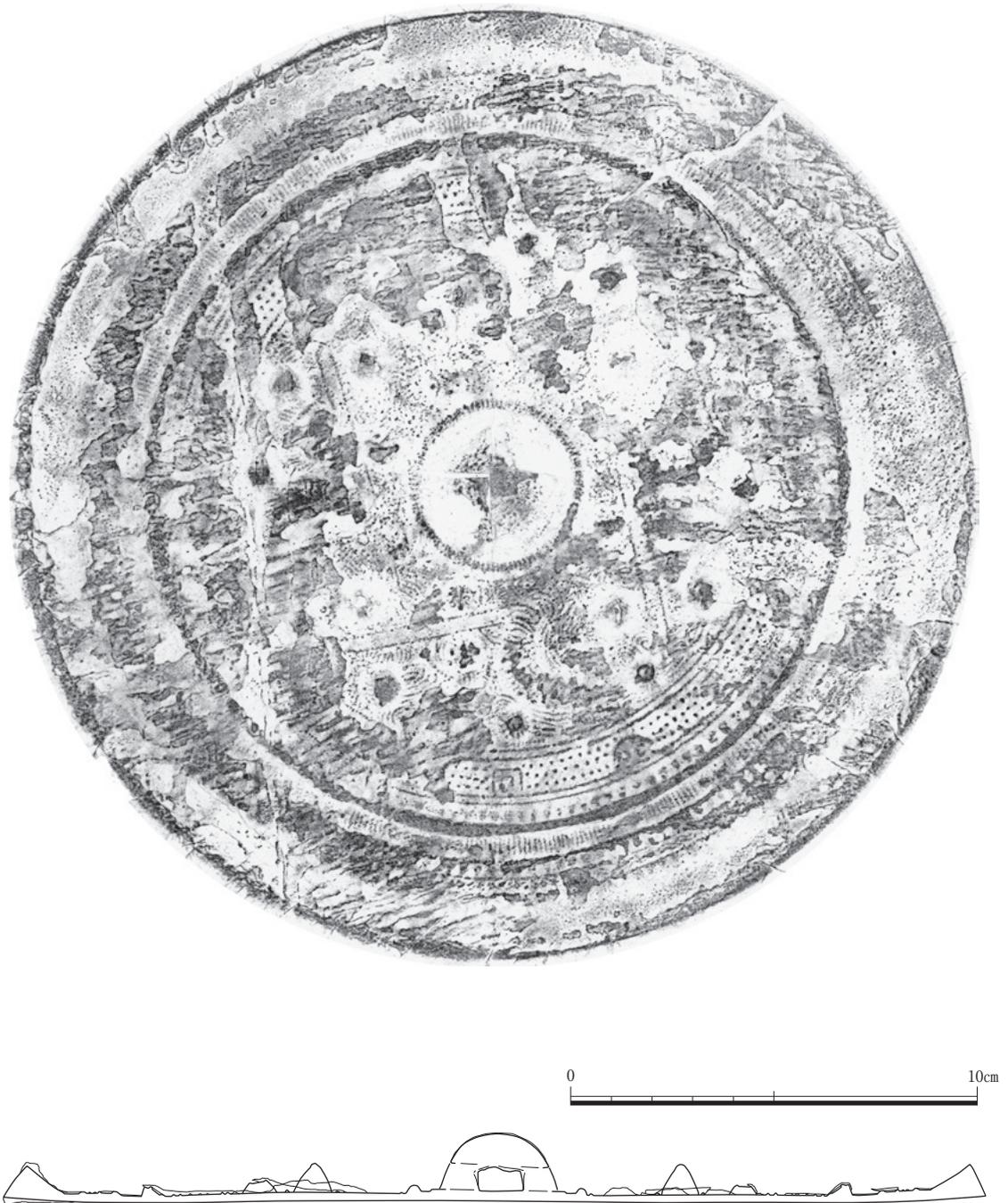


図2 裁1 龍鏡 (3:5)

をめぐらし、頂部に凹線をもつ断面三角形のものである。界圏は幅約6mm、高さ約3mmである。界圏の内斜面には外向する鋸歯文がほどこされる。外斜面は無文である。界圏外側に位置する内区副文部には、幅約6mmの櫛歯文帯を配する。櫛歯文は直行し、1mm程度の狭い間隔で施文される。

外 区 内区から外区へは段差を経て至る。段差の斜面は無文であり、その高低差は1mm前後ときわめて小さい。一段高い外区の文様は、内側から鋸歯文帯－複線波文帯－鋸歯文帯の3帯からなる。鋸歯

1 鏡

文は外向する。文様帯の幅はいずれも4.5mm程度である。外区文様帯の外周にはきわめて小さな段差がつけられており、外周の素文部との境界をなす。外区文様帯部分の厚さはほぼ均一であり、その外側は徐々に厚みを増す縁部となる。縁部形態は断面三角形に近い部分もわずかにあるが、大部分は斜縁である。

製作技法 全体に布が付着しているために、表面状態を観察できる部分が少なく、鑄造ならびに研磨の状況を把握することは難しい。

文様は突線の表出などが細くかつ鮮鋭であり、鑄上がりは良好である。また、表面状態を視認できる範囲内では、鑄巣や湯周り不良などの鑄造欠陥はみいだせない。縁頂部など上面部分は丸みを帯びておらず、摩滅などの影響はほとんどない。付着物により全体の表面状態を把握できないため、湯口などの鑄造にかかわる所見を提示することは難しい。ただし、大きく亀裂の入る部分の縁部は、ほかの部分が外斜面の長さが約1.0cmであるのにたいし、8.5mm程度と薄くなる。また、その位置は鈕孔の開口方向の延長線上にあり、かつ2つある鈕孔のうち湯周り不良を想定しうる側に相当する。したがって、表面観察による限りは、亀裂が大きく入った縁部の付近に湯口が設定されていた可能性が高い。

鏡面と縁部外斜面、縁部内斜面から外区文様上面、さらに内区乳上面において仕上げの研磨を確認できる。いずれも条痕を残さないような丁寧な仕上げの研磨をほどこす。

なお、縁部にみるわずかな形態の変異は、鑄張り除去にともなう外斜面の仕上げ加工の程度の差によるものである可能性を考慮しておきたい。

位置づけ 日本列島で製作されたと考えられる仿製鏡である。先行研究による当該資料の位置づけを確認すると、車崎正彦の分類では第二群同工鏡F [車崎1993]、辻田淳一郎の分類ではI群Ba系に属し、そのなかでも第3型式に比定される [辻田2000・2007]。辻田の時期的な整理では、前期のなかでも新段階の仿製鏡となり、前期古墳を4期区分した際のもっとも新しい時期に位置づけることになるという [辻田2007]。また、林正憲の分類では龍鏡Ⅱ類単胴系 [林2000]、下垣仁志は本例を自身の龍鏡A系（前期中段階）に位置づける [下垣2011a、60頁]。ただし、下垣分類の龍鏡A系は神像胴部を明確に表現する系列であり [下垣2011b、37頁]、本例には神像に明確な胴部がともなわない点を考慮すれば、むしろC系に帰属させうる余地もあろう。その場合は、龍鏡C系の第1段階に比定しうると考える。時期的には古墳時代前期中段階となる [下垣2003]。

裁2 三角縁四神四獣鏡 三角縁新作徐州銘四神四獣鏡

三角縁神獣鏡目録の19番 [京都大学考古学研究室2000] に該当する鏡である。同範鏡番号は与えられていない。同一文様の鏡には、兵庫県森尾古墳第2石室と奈良県佐味田宝塚古墳からの出土鏡、さらに出土地不明のビッドウェル氏蔵鏡を含めて合計4面が確認されている。細部に至るまで一致をみせるのは佐味田宝塚古墳出土鏡のみであり、森尾古墳出土鏡とは中途と末尾において、出土地不明鏡とは末尾において、銘文の部分的な改変がみられる。

遺存状態 縁部から鈕にかけて大きく亀裂が入り、鈕が完全に外れた状態にあったものを、現状では接合と補填によってほぼ完形に復元している。鈕から放射状に伸びる亀裂があり、遺存状態はきわめて悪い。保存処理はおこなわれていない。

付着物として、布が縁部外斜面から鏡背面の外区を経て、内区主文部の一部までの全体の1割弱の範

圃に明瞭に存在する。布は粗い目の布が3重ほどに重なり、さらに目の細かい布が2重程度に付着する。異なる目の布の上下関係ははっきりしない。このほか、布目はみとめられないが、鏡背面の広範囲に有機質が錆化して付着する。鏡面側は縁部に沿うように布が付着するが、そのほかの大部分は錆に覆われた状態である。鈕に近い直径10cmほどの範囲は、付着物と錆がともにみとめられず、本来の表面状態をとどめる。

色調は布が付着する部分は濃緑色であるが、錆に覆われた大部分は淡緑色から濃緑色を呈する。薄い錆の膜に覆われていると考えうる部分は、やや赤味の強い褐色を呈する。この赤味のさした部分について、赤色顔料の影響を否定することはできないが、明らかに赤色顔料が付着したと断定できるような状況ではない点を強調しておきたい。鏡面の錆に覆われていないところについては、白銅色に近い色調を呈する部分があり、地金の状態をうかがわせる。錫分の高い青銅が素材である可能性を示唆する。

法 量 もっとも歪みのない部分をみると直径が26.0cm、厚さは内区で1.5mm程度を主体とし、外側に近い部分では2.5～3mm程度となる。外区は厚さ約4～6mm、縁端部で1.2cm前後となる。鏡面の反りも正確さは欠くが、5～6mm程度となろう。現重量は1639.3gである。

構 成 中心には半球形の鈕があり、圏線と界圏によって内区主文部と内区副文部とを分ける。内区の外側には、一段高い外区がある。

鈕 直径3.9cmに対して、鏡背面からの高さが1.7cmほどとごくわずかに低めの鈕である。ただし、上面は丸みをおびており、断面形態は整った半円形となる。分類においては、鈕a式〔岩本2008〕に属する。直径約4.7mm、高さ1mmほどの円座にのる。円座の外側には、さらに幅2.5mm、高さ約1mmの断面蒲鉾形を呈する有節重弧文座がめぐる。鈕孔はいわゆる長方形鈕孔〔福永1991〕であり、上辺が約6mm、下辺が約1.0cm、高さが約4mmである。上辺が下辺より短い台形をなす。鈕孔下辺が内区の鏡背ベース面より2.5mm程度高い位置にある。鈕孔は両方の孔がおおむね水平に開いており、傾かない。鈕孔の開口方向と鏡背文様の対応関係をみると、主像の2体並ぶ神像の間に位置する。また、その位置は銘文の始点・終点と一致する。

内 区 文様帯の中央に位置する4つの乳によって、幅約5.6cmの広い内区主文部を区画する。乳は直径が約1.1cm、鏡背面からの高さが7mm程度の大型のものである。頂部は先端をみだしにくいほど丸みを帯びた形状であり、乳iv式に属す〔岩本2008〕。乳座はない。

乳による各区画には、神像2体あるいは獣像2体のいずれかを並列させる複像式の配列を採用する。神像を置く区画と獣像を置く区画は、隣り合うように交互に割り付けられる。したがって、神像区と獣像区のそれぞれは鈕をはさんで対向する。神獣像配置において注目すべきは、2つある獣像区がそれぞれに配置を異にする点である。1区画においては獣像が2体の頭部を向かい合うように配置されるが、もう1区画ではともに頭部を区画の外側に向ける。小林行雄の配置分類のC〔小林1971〕にあたる。神像ならびに獣像はともに合計4体ずつ存在する。細部には個々で差異がわずかにあるものの、基本的にいずれもほぼ同様の表現である。岸本直文による神獣像表現分類では、表現⑭に該当する〔岸本1989〕。

神像は正面を向く坐像であり、神座が大きく広がらない。両肩からは雲気が長く伸び、頭頂部はやや大きな膨らみであらわし、被り物には二種の表現がある。一種は3本の突起により表現される三山冠であ

1 鏡

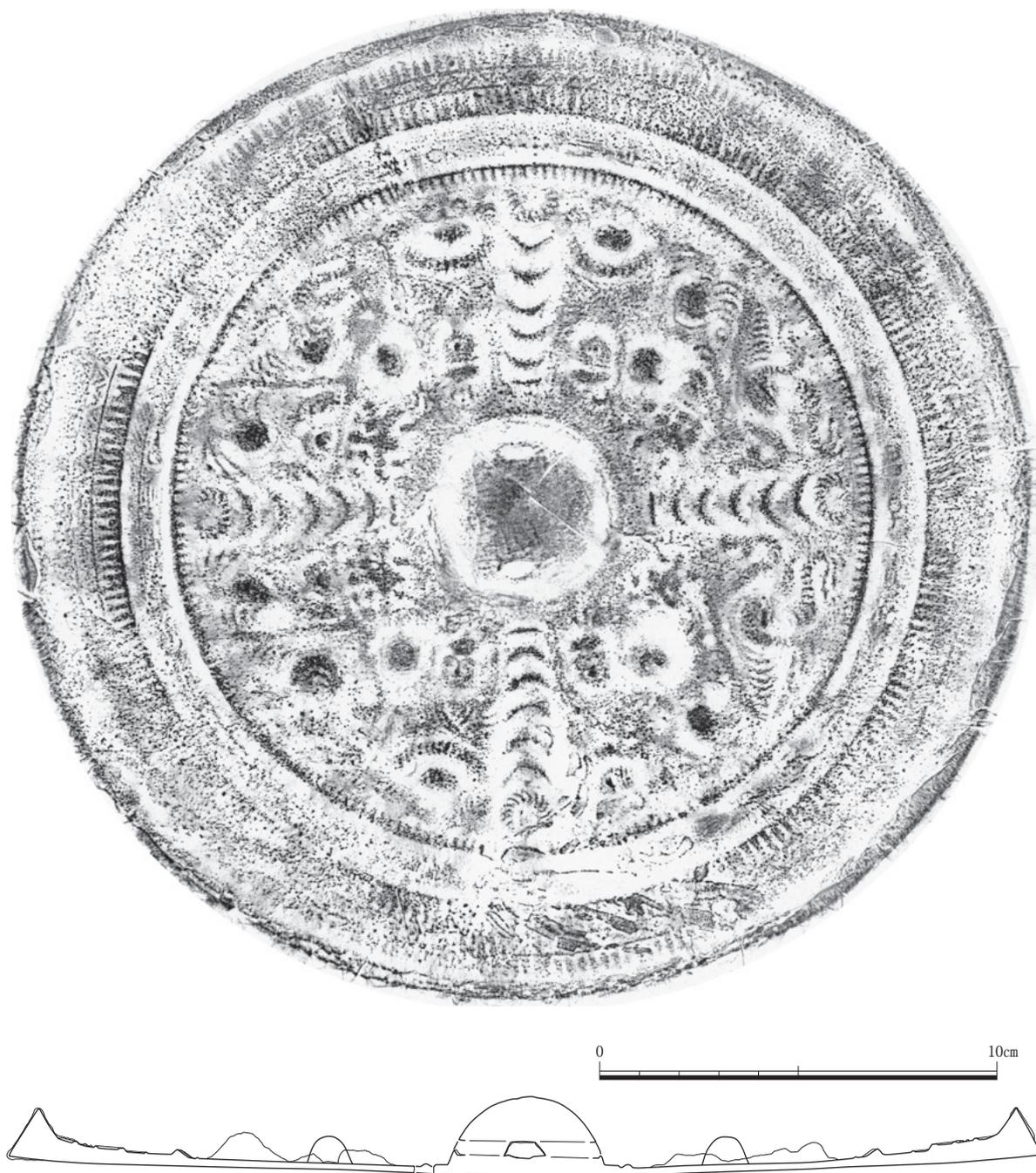


圖3 裁2 三角緣新作徐州銘四神四獸鏡（3：5）

り、もう一種は両側から内側に渦文が巻き込む渦状冠である。顔面は線の太さを使い分け、鼻筋を太く明瞭に、眉と眼さらには口を細線で表現する。着衣の上半部には横線を充填し、衿を2本線であらわす。袂は弧状の細線を重ねて襷とし、全体を輪郭線で囲む。神座の雲気が強く巻き込む。神像の間には、円環状の掬文に5段の房を備えた傘松形文様を置く。傘松形文様は澤田秀実の分類ではc類となるものである〔澤田1993〕。

獣像は顔面を正面に向け、体部を側面観で表す。頭頂部をややふくらませ、突起で表現した眼と鼻をもつ。頭頂部の脇にはいずれにおいても両脇から角が伸びる。目の下にはふくらみによって大きく開いた口を表現する。口のなかには舌がみえ、維綱を銜える。頸は頭部のやや後ろ側にとりつき、体部と連続する。体部は胸、肩から腹、尻にそれぞれ数条の突線によって羽毛を表し、前脚と後脚ともに爪をもつ。体部の後方には長く伸びる尾が付属する。全体に躍動感あふれた表現をとる。

内区主文部の外周には、直径約9.2cmの円圈と、幅5mm、高さ2mmほどの界圈がめぐる。界圈の斜面には外向する鋸歯文を入れる。

界圈の外周には2条の文様帯からなる副文部がある。内側が幅7mmほどの銘帯であり、外側が幅約4mmの櫛歯文帯である。銘帯には、「新作大^眞竟 幽律三^眞剛 配徳君子 清而且明 出徐州 師出洛陽 彫文刻鏤 皆作文章 左龍右虎 師^眞子有名 取者大吉 宜子孫」という四言句を基調とした吉祥句を入れる。銘文の始点と終点にあたる部分には、珠点を十字に5個配した文様を置く。櫛歯文帯は、斜行する櫛歯を1mm前後の間隔で密に配する。

外 区 外区には内区より2mm弱の段差を経て至る。文様帯のもっとも厚い部分でおよそ5mmに達する厚い外区である。特徴的であるのは、外区の内側から外側へと反りをもって徐々に厚みを増す点である。外区は厚みをもち、縁部に至る屈曲が明瞭ではない点の特徴である。縁の突出は三角縁神獣鏡のなかではやや弱い、外区1式に位置づけることができる〔岩本2008〕。

外区文様帯は3条からなる。内側から鋸歯文帯—複線波文帯—鋸歯文帯である。内側の鋸歯文帯は幅6mm程であり、細長い形状の外向きの鋸歯文を配する。中央の複線波文帯は幅5mm程度であり、2条の波文帯からなる。波文の屈曲の文様帯の内側はひとつながりとなっているが、外側はとぎれた状態となる。外側の鋸歯文帯は幅5mm弱、内側と同様に外向きの細長い鋸歯文を配する。外区文様帯から縁部と至る境界は緩やかな屈曲がある。縁部の断面形態は正三角形に近い形態をなす。

製作技法 布および錆の付着が著しく、鑄造や研磨についての所見は限定される。全体を観察しうる範囲では、明らかな鑄造欠陥はみとめられず、鑄上がりは良好であったと考える。また、縁頂部も鋭い形状を呈しており、摩滅などの影響も想定しがたい。湯口については、錆と付着物のため表面観察だけでは明らかにしがたい。

鏡面および縁部外斜面においては、研磨をほどこしたようすを部分的に確認できる。鏡面については、条痕のみとめられない丁寧な仕上げの研磨をおこなう。いっぽう、縁部外斜面には研磨によって生じた細かな面がみとめられる。キサゲ状の工具によって表面を研削したような状態である。やや粗い仕上げの研磨といえよう。外区文様上面は部分的な観察にとどまるが、やや丸みをもちつつきわめて細かな皺が入る。はっきりとした仕上げの研磨はほどこされておらず、鑄放しに近い状態であると考えておきたい。

1 鏡

位置づけ 三角縁神獸鏡のなかでも舶載鏡として分離しうる一群に属する鏡である。本鏡は古くに富岡謙蔵の考証で示されたように、銘文の用字法から製作年代をほぼ魏代に比定しうる点〔富岡 1916〕において、三角縁神獸鏡のなかでもきわめて重要な資料の一つである。三角縁神獸鏡の編年においては、澤田秀実による 5 段階区分では第Ⅲ段階〔澤田 1993〕、福永伸哉の 4 段階区分では B 段階〔福永 1994〕、岸本直文の 5 段階区分では第Ⅲ段階〔岸本 1995〕、岩本崇の 4 段階区分では第 1 段階〔岩本 2008〕に位置づけられる。三角縁神獸鏡のなかでは、古段階ないしは中段階の資料である。

裁 3 変形四獣鏡 四獣鏡

主像文様として獣像を 4 体配する、四獣鏡である。

遺存状態 表面観察による限り、亀裂や破損のみられない完形品である。鏡体の歪みも確認できないことから、遺存状態は比較的良好であるといえよう。保存処理はなされていない。

付着物として、鏡背面の広範囲に断片的だが布がみられる。目の細かい布が 2 重以上に重なりをもって、全体を覆うように付着する。布は縁部外斜面を経て、鏡面にもおよぶ。鏡面側はとくに厚く付着し、目の細かい布が一部で 4 重以上に重なる状況を観察できる。赤色顔料の付着ははっきりしない。

布が付着する部分の色調は淡緑色から濃緑色であり、錆により覆われている部分は淡緑色となる。また、土が広範囲に付着し、淡い褐色を呈する。これらの付着物の間に部分的ではあるが、本来の地金の光沢をとどめる部分を確認できる。地金部分の色調は白銅色を呈しており、錫分の高い青銅を素材とする可能性をうかがわせる。

法 量 直径約 13.6cm、厚さは内区で約 1.5mm、外区で約 3.5～5mm、縁端部で 7.5mm ほどである。鏡面の反りはおよそ 3mm となる。現重量は 408.8g である。

構 成 中心には半球形の鈕があり、圏線によって内区主文部と内区副文部とを分ける。内区の外側には、一段高い外区がある。

鈕 鈕は直径約 2.1cm、鏡背面からの高さ約 9mm のわずかに低いといえる半球形となる。鈕座は直径約 2.6cm の円圏座である。鈕孔は長方形であり、いずれも幅約 6mm、高さ約 3mm である。孔付近をわずかに面取りし、丸く仕上げる。鈕孔の底辺と鏡背面の高さが一致する。鈕孔の開口方向と鏡背文様との関係をみると、鈕孔は乳による区画の中心を通るようにあけられる。

内 区 内区主文部は幅約 2.3cm と直径に比してやや狭く、文様帯のほぼ中央に位置する 4 つの乳により区画される。乳は直径が 5mm 程度、鏡背面からの高さ約 2mm の低いものであり、やや丸みのある円錐形となる。付着物により判然としないため、乳座の有無は不明である。

乳による各区画には、おおむね共通した主像を配置する。主像はいずれも側面観を表現したものであり、デフォルメの少ない獣像である。上顎と下顎を備えた頭部の後ろ側に細長い頸がとりつき、さらに胴部へと至る。胴部には前脚と後脚、さらには尾を細長く描写する。4 体の獣像のうち 2 体が頭を時計回り方向に、残る 2 体が反時計回り方向に向け、頭の向きが異なる獣像を隣り合う区画に配置する。結果として、獣像は向かい合う 2 体が鈕を挟んで対置することとなる。なお、主像間の隙間に、文様を充填するようなことはしない。

内区主文部の外側に位置する内区副文部は 2 条の文様帯からなる。内側が幅約 5mm の擬銘帯、外側が幅約 4mm の櫛歯文帯である。擬銘帯には方形状や渦文状の表現がみとめられるが、付着物により詳細は



図4 裁3 四獣鏡(3:5)

明らかでない。櫛歯文帯は直行する櫛歯を1.5mm間隔とやや粗く充填したものである。

外 区 内区から外区の間には段差がある。段差の斜面には文様がほどこされず、その高低差は約2.5mmと大きい。一段高い外区文様は、内側から鋸歯文帯－複線波文帯－鋸歯文帯の3帯で構成される。鋸歯文はいずれも外向する。文様帯の幅は、いずれも4～5mm程度である。外区文様帯の外周にはきわめて小さな段差があり、外周の素文部との境界となる。外区のもっとも内側の内区へ至る斜面との境が高く突出する特異な形態をもつ。縁部は、外側へと徐々に厚みを増す斜縁である。

製作技法 布の付着が顕著であるが、表面の状態を観察できるところが部分的に存在する。縁頂部は丸みを帯びず、鮮鋭な形状を保っていることから、摩滅などの影響は想定しがたい。わずかに確認しうる外区文様には上面にやや丸みが見られるが、明らかな鑄造欠陥もみだせず、鑄上がりは悪くない。むしろ文様や形態の鮮鋭な表出は、鑄造後の仕上げの研磨の影響が強いと考えることが可能であり、本鏡の鑄上がりは比較的良好であったと考える。後述するように、文様上面における仕上げの研磨がやや弱いという点が、表面状態のあり方と密接にかかわっているのであろう。湯口については、付着物のため、表面観察では明らかにしがたい。

地金を観察できる鈕頂部、外区文様帯上面、縁部内外斜面、鏡面において鑄造後の仕上げの研磨を確認できる。とくに、鈕頂部、縁部内外斜面、鏡面では、きわめて平滑な表面状態であるにもかかわらず、

1 鏡

研磨条痕はみられない。非常に丁寧な仕上げの研磨がほどこされたものとする。たいして、外区文様帯上面はやや光沢が弱いことから、ほかの部位と比べると研磨の程度は弱いと判断できよう。内区の文様の大部分も同じような状態であると想定される。

位置づけ いわゆる仿製鏡である。古墳時代仿製鏡を外区文様から整理した森下章司の分類では、斜縁四獣鏡B系に属し、そのなかでは1式に位置づけられる〔森下1991〕。古墳時代中期の仿製鏡生産の嚆矢となる系列と評価されており、中国鏡の忠実な模倣を實踐した事例とされる。酷似する資料に、京都府久津川車塚古墳から出土した4面がある。

裁4 半円方形帯神獸鏡 画文帯環状乳四神四獣鏡

外区文様に画文帯を採用し、環状乳によって区画した内区に主像として神獸像をそれぞれ4体ずつ配する、画文帯環状乳四神四獣鏡である。

遺存状態 表面観察においては顕著な亀裂や歪みなどがみられない、完形品である。部分的に錆がみられ、表面に剥離の生じたところもあるが、全体として遺存状況は比較的良好である。保存処理はおこなわれていない。

鏡背面には、文様の凹部を中心として鮮やかな色調の赤色顔料が薄く付着している。布など有機質の付着はみられない。錆の部分は緑色となっているが、その他は漆黒色を呈しており、光沢がある。

法 量 直径約14.2cm、厚さは内区で約1.3～1.8mm、外区および縁部で約3.2～5.0mmである。現重量は405.5gである。

構 成 中心には半球形の鈕があり、圏線によって内区主文部と内区副文部とを分ける。内区の外側には、界圏を隔てて一段高い外区がめぐる。

鈕 直径約2.4cm、鏡背面からの高さ約1cmのわずかに高さが低い鈕である。上面はやや平坦に仕上げられており、断面形態は扁平な半円形である。鈕は直径約3.2cm、高さ約1mmの円座にのり、円座の外周には幅2mm弱、高さ約1mmの断面蒲鋸形の有節重弧文座がめぐる。有節重弧文座の外周には、さらに円圏が配される。鈕孔は下辺が直線的ながらも、両側辺と上辺が弧状となる長楕円形に近い形態である。幅約7mm、高さ約4mmであり、孔付近を面取りして丸く仕上げる。もう一方の鈕孔は幅約6～7mm、高さ約4～5mmであり、全体に丸みが顕著な形態である。著しい丸みについては、一方の鈕孔に湯周り不良の影響を想定しておきたい。鈕孔の開口方向と鏡背文様との相関関係は、鈕孔が鈕をはさんで対置する神像区に鈕孔があくようになっているが、神像区の中心からはわずかにずれがある。

内 区 幅約1.8cmの内区主文部の外側に近い位置に、直径約8mm、高さ約3mmの環状乳を8個配して区画する。環状乳には鱗状あるいは獣毛状の文様が周囲にとりつく。

乳による各区画には、神像と獣像がそれぞれ別に配列される。神像は脇侍とともに複数体が、獣像は単一で置かれる。神像区と獣像区は交互に割り付けられる。細部の描写には若干の相違があるが、神像と獣像ともにほぼ同様の表現のものを各区画に配する。

神像は正面を向く坐像を基本とし、大きく両脇へ広がる神座に坐す。衿をきわめて立体的に表現し、両肩からは細密な描写の雲気が上方へと広がる。頭部は丸いふくらみであらわす。頭部の被り物には、方形ないしは逆台形のものと、突起を3本備えたものがある。図で向かって右側は突起3本が表現される三山冠をもつことから東王父と考えられる。たいする左側の方形の冠をもつ神像が西王母である



図5 裁4 画文帯環状乳四神四獣鏡（3：5）

う。東王父と西王母にはそれぞれ1体の脇侍がつき、上部には弧文を連ねて大きな傘状のものをかける。この東王父と西王母の区画に直交して、神像区がさらに配置される。ともに2体の脇侍が付属する。図で上に位置する区画では、神像が大きく腕を広げる状況から、白牙が弹琴するようすを表現しているようである。両側にみられるいずれかが鐘子期であろうか。さらに、対置する区画の神像は黄帝ないしは句芒と考えられるであろう。

獣像については、細部の表現にあまり差がなく、ほぼ同一の文様を繰り返して、時計回りに旋回する。眼と鼻さらに眉などの各部を突起によって描写し、維綱を手にもつとともに、大きくあけた口で銜える。口の内部には歯牙と舌が明瞭に表現される。頭部の表現は比較的写実的であるが、頭部から伸びる胴部は形骸化した表現である。頭部に長い頸がとりつき、頸には鱗状の文様が充填される。さらに、胴部の肩にあたる部分は環状乳と同化し、環状乳に羽毛の表現がともなう。さらに獣毛の表現が環状乳に付属する。

内区主文部の外側に位置する副文部は幅約9mmであり、10個の半円と10個の方格を交互に配することで文様帯を20区分し、それぞれの区画内を円環文2個と多数の珠文で充填する。珠文は整然と密に配列される。半円は横幅約1.3cm、縦幅約7mm、高さ約1.5mmであり、円弧の内側に突線をめぐらす。半円上部は無文であり、斜面も装飾をもたない。方格はおよそ8mm角、高さ1mm強ほどである。上面を突

2 石製品

線で内側を十字に仕切り、その1つずつに文字を配して銘文とする。銘文には「上方作竟自有紀 辟去不羊宜古市 上有□王父西王母 令人長命多□孫 夫吉兮 君宜子兮 長宜官王」とある。七言句を基調とした吉祥句を採用する。銘文形式は、樋口隆康のPa式である〔樋口1953〕。

外 区 内区の外側には2重の界圏がめぐり、内側の界圏は高さ約1mmと低く、内側斜面には弧文を連ねる。外側の界圏は頂部が凹線状にくぼむ高さが5mm程に達するものであり、内側の斜面に外向する鋸歯文を配する。一段高くなった外区の内側にある凹部には画文帯が配される。画文帯は反時計回りにめぐり、走獣によって引かれる雲車、円環をもつ侍仙、朱雀を含めた鳥文、玄武をはじめとする多彩なモチーフによって構成される。

画文帯のもっとも外周には1条の円圏がめぐり、ごく小さな段差を経て、平縁の縁部に至る。縁部の上面にも文様はほどこされる。三角形の文様に短い突起を付したものであり、珠文列による区画を介してこれを繰り返す。画文帯の幅は約7.5mm、縁部の幅は約5mmである。

製作技法 全体に上面に丸みがあることから、摩滅などの鑄造後の改変が少なからず想定される点には留意が必要である。そのうえで、図で下側に位置する鈕孔が、上側のものよりも明らかに丸みをおびているのは、湯周り不良の影響であろう。この鈕孔の延長にある方格は銘文の文字の表出がほかよりもあまい。帯状に鑄引けが生じたものと判断できることから、この帯状の湯周り不良のある部分の縁部付近に湯口が存在した可能性を考慮しておきたい。

鑄造後の仕上げの研磨は、摩滅の影響を排除しきれないが、鈕の上部が平坦になっている点からも徹底したものであったと考える。鈕のみならず、半円や方格の上部、さらには外区上面、縁部外斜面、鏡面に丁寧な仕上げの研磨をほどこしたようである。

位置づけ 内区の神像区のうち2つにみられる傘状の区画や、外区に菱雲文帯や連渦文帯ではなく三角形と珠文で構成したやや特異な文様を採用する点において、やや異例の存在といえる画文帯環状乳神獸鏡である。画文帯環状乳の神獸鏡の系統的な整理を試みた上野祥史の分類によれば、異例ながらも環乳ⅡCに帰属するものと考えられ、華北（華北東部）系に位置づけうる。製作時期は2世紀後半から3世紀前半に比定される〔上野2000・2007〕。ほかの先行研究の位置づけにおいても、漢鏡7期第2段階〔岡村1999〕であるなど大枠の位置づけは変わらない。

銘文は七言句からなるものであり、どちらかといえば画文帯環状乳神獸鏡には少なく、画像鏡に多い形式である。神像の表現は立体感がやや乏しく、比較的近い例として上方作系浮彫式獸帶鏡のそれをあげうるであろう。銘文の形式とともに、本鏡の位置づけを考える際に一つの手がかりになるものと考えられる。鈕孔形態も上方作系浮彫式獸帶鏡と共通点が多く、上野分類によって想定される製作系統の評価とも矛盾しない。

(岩本 崇)

2 石製品

総数58点の石製品がある。すべて「裁○」という具合に漢数字で台帳番号が記入されているため、本稿もそれを踏襲する^{註4}。

器種および数量は、紡錘車形石製品4点（裁17・18・19その1・19その2）、筒形石製品1点（裁

20)、鋏形石9点(裁21～29)、車輪石17点(裁30～45・47)、石釧27点(裁46・48～73)である。各個体の大きさ・重量などの計測値は一覧表(表1～3)に委ねる^{註5}。

石材は、北條芳隆の着想[北條1994]を再構成した岡寺良の分類[岡寺1999]にしたがい、肉眼観察で識別した^{註6}。岡寺による分類基準は、つぎの通りである。

材質Ⅰ いわゆる硬質の碧玉(ジャスパー)の内、濃緑色を呈するもの。島根県花仙山産が主体であると推定される(北條の材質Ⅰの一部)。

材質Ⅱ 硬質の碧玉の内、Ⅰ以外のものと、緑色凝灰岩(グリーンタフ)の内、ⅢとⅣを除く材質。淡緑色のものが多いが、量的にはあまり多くはない(北條の材質Ⅰの一部と材質Ⅲ)。

材質Ⅲ 緑色凝灰岩の一種。軟質で淡緑色を呈する。比重は軽く、ほとんどが風化している特徴を持つ。石川県片山津遺跡産が主体ではないかと考えられる(北條の材質Ⅱ)。

材質Ⅳ 緑色凝灰岩で、濃(暗)緑色の葉理が縞状に入る特徴的なもの(北條の材質Ⅳ)。

あらためて補足すると、材質Ⅰは濃緑色を呈し、表面が光沢を帯びることが多く、いかにも硬質の質感をもち、一般的に「碧玉」との認識がもたれている石材を指す。実際には、碧玉と硬度の高い緑色凝灰岩との両者が含まれるであろう。材質Ⅲは淡緑色を呈し、表面の風化が進行していることが多く、いかにも軽量・軟質の質感をもち、一般的に緑色凝灰岩と呼ぶ石材を指す。また、材質Ⅳも緑色凝灰岩と認識されている。木目のような特徴的な縞をもつもので、相対的に材質Ⅲよりも硬く、重い。ただし、一部の個体は材質ⅢとⅣの中間的な特徴をもつものがある。これらに対して、材質Ⅱは固有の特徴をもって識別されるものではなく、緑色の石材のうち、材質Ⅰ・Ⅲ・Ⅳのいずれでもないもの、と消去法で判別するものと理解した。(北山峰生)

1 鋏形石

各個体の大きさ、重量は表1に記載しているが、鋏形石は形状がやや複雑なため本文中にも数値を示す。またこの9点は、いずれも先行研究において紹介されてきた資料であるので、近年発表された論考中の資料番号を対照して記載する。

裁21

淡灰緑色を呈する軟質の緑色凝灰岩製である(材質Ⅲ)。全体として角張った仕上がりで、稜線も明瞭である。全長19.4cm、最大幅11.3cm、重さ340gで、北和城南古墳出土品の中では比較的大きな個体である。外面にはごく僅かではあるが粘土や赤色顔料が付着するが、顕著ではない。摩滅や欠損があるが、表裏面の若干の剥離を除けばほぼ完形である。他の個体にも共通する特徴として、全面に細かな研磨痕が残り、また左右方向のひねりは認められない。笠状部から環体部にかけては厚みがあり、笠状部下端で最大厚2.7cmである。板状部は急に薄くなり、下端に向かって更に薄くなりつつ、縦方向(前方)に反る(8°^{註7})。

笠状部 ほぼ水平で、横断面は蒲鋒形である。笠状部の装飾は上から匙面、2条突線、匙面の構成で、裏面は笠状部下端が1条の突線状になり、これが笠状部と環体部との境をなす。中間の2条の突線はほぼ連続して笠状部を一巡するが、裏面端部で左側面との接続部分にわずかに食い違いが生じている。表面が全体として非常に緩やかな匙面をなすのに沿うように、裏面は縦断面方向に凸面をなす。裏面には

2 石製品

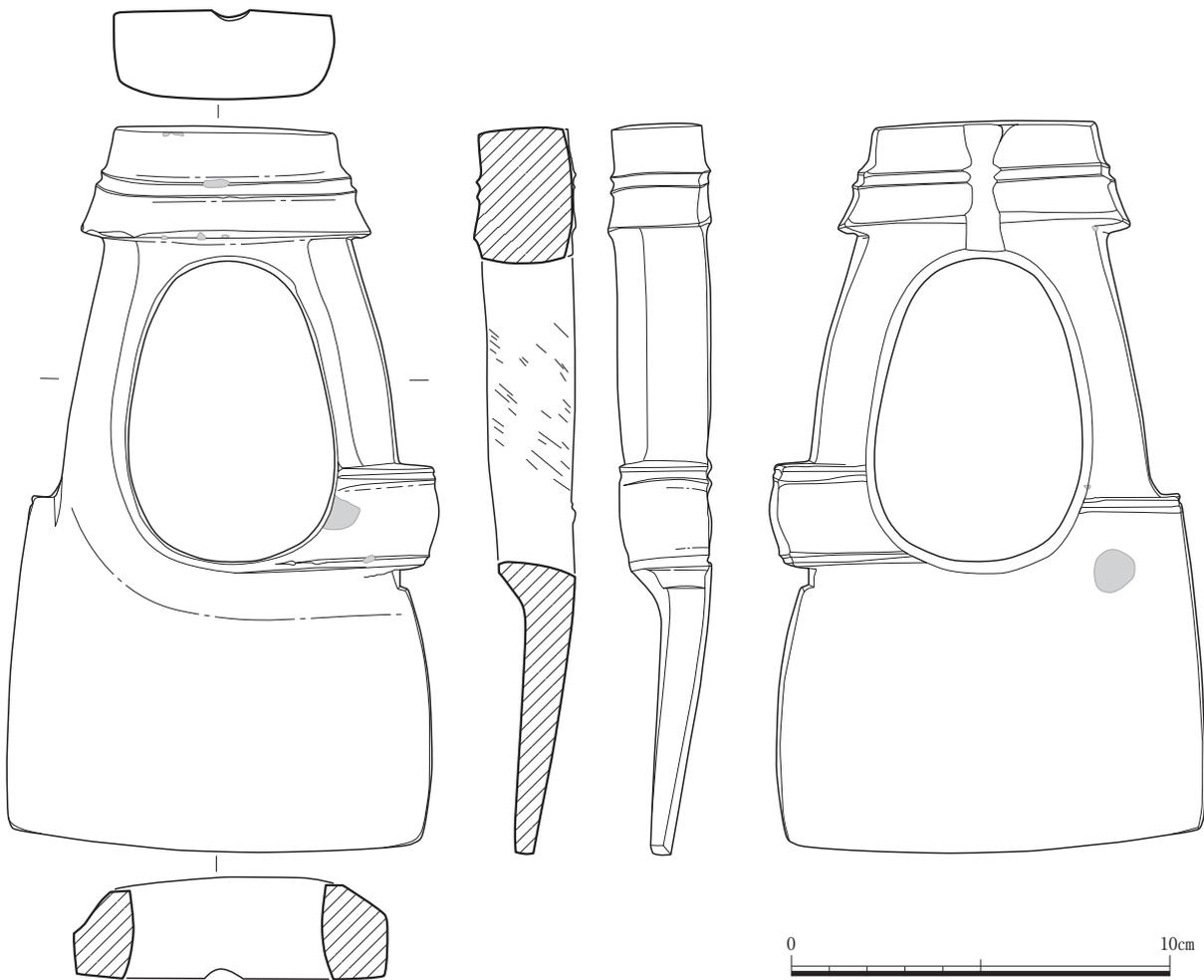


図6 裁21 鋏形石（1：2）

断面半円形の縦溝が浅く彫られており、平面形は直線状だが、中間がやや細くなる。笠状部下端の左右側面は環体部との段差を大きく、はっきり表現する。

環体部 内孔は $8.05 \times 5.5\text{cm}$ の卵形を呈する。内孔面はやや膨らみをもって内傾する。環体部は右の傾斜がやや大きく不均等なため、中心軸^{註8}がわずかに左へ傾く（ 2° ）。環体部平坦面は頂部から側部にかけて明瞭である。

突起部 突起部はその下端が内孔下端と水平になる位置に取りつく。突起部の上下で突出度の差は顕著でないが、中央がより突出する。横断面は半截蒲鋒形である。装飾は上から2突線、凸面、2突線の構成で、表面から右側面、裏面へと連続している。最下段の突線は一部で稜線状になるなどやや不明瞭になっている。

板状部 板状部と突起部との境は鍵の手状に決る。左肩から下端まで 9.4cm である。板状部左肩は環体部との境を明瞭に削り出す。左肩の裏面は2突線が削り出され、左側面までのびて凹凸を彫り出している。板状部の左側面は、やや開きつつ下端に向かってわずかな弧を描きつつのび、右側面と下端は緩やかな弧状を呈する。下端は幅 10.9cm で大きくは開かない。

櫻井久之のNo.8（直系I）〔櫻井1991〕、北條芳隆のNo.2（第一群B類4段階）〔北條1994〕として紹

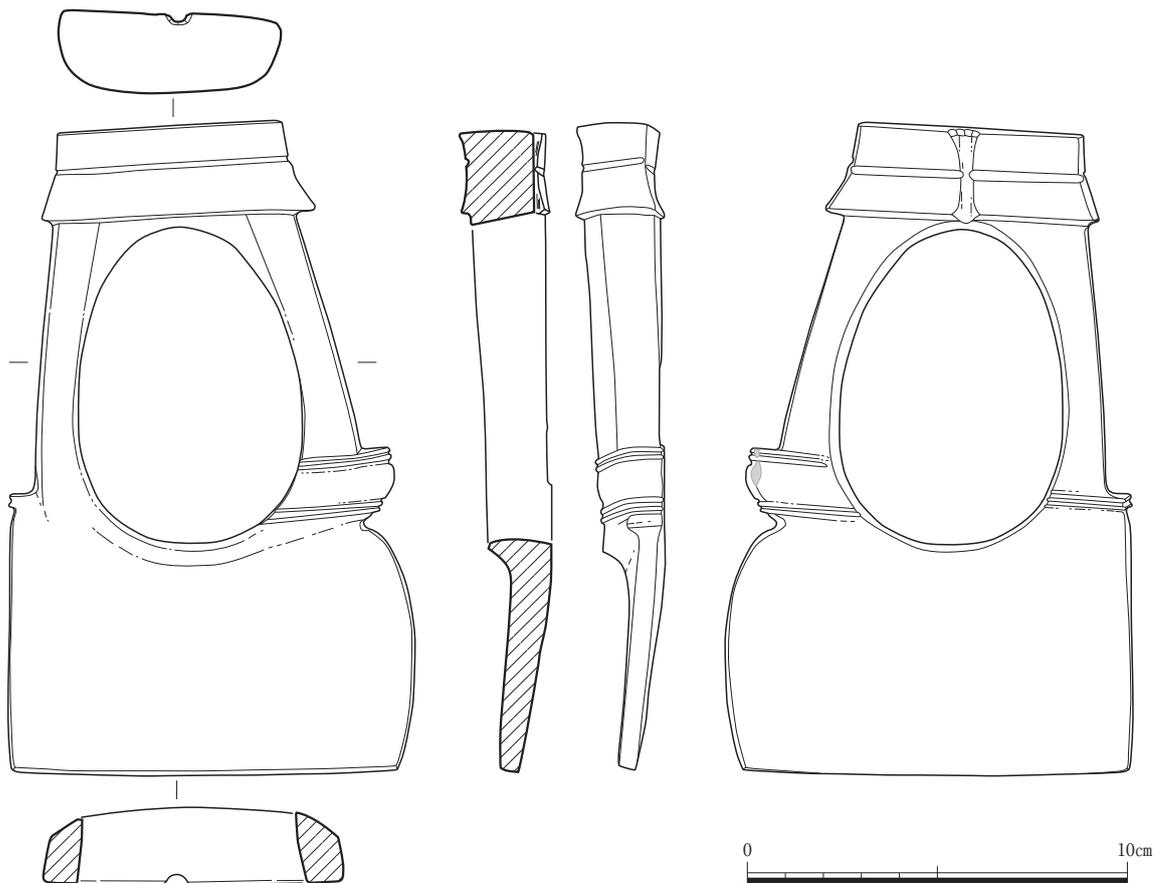


図7 裁22 楕形石（1：2）

介されている。

裁22

淡灰緑色を呈する硬質の緑色凝灰岩製である（材質Ⅳ）。全体に角張っており、稜線も明瞭な仕上がりである。全長17.3cm、最大幅10.7cm、重さ240gで、本資料群中では中間的な大きさである。縦方向にやや粗い明瞭な葉理が観察できる。沈線部分などの凹みや裏面に若干の粘土や赤色顔料が残る以外、付着物はほとんどない。全体的に洗浄されているようである。突起部などのわずかな剥離を除けばほぼ完形である。笠状部から環体部にかけて厚みがあり、笠状部下端で最大厚2.4cmである。板状部では半分ほどの薄さになり、下端に向かってやや薄くなりながら、縦方向に反る（7°）。

笠状部 やや左に傾き、横断面は蒲鉾形である。笠状部は緩い匙面が一巡する形状で、全体として中央が凹む。装飾は上から緩い匙面、太い1条の沈線、緩い匙面の構成で、沈線は笠状部を一巡するが、裏面両端で側面との食い違いが生じている。裏面には縦溝があり、笠状部の裏面中央が凹む形状により縦溝平面形は中程に向かってやや細くなる。溝の上端部分には打ち欠いたような痕跡が残る。笠状部下端の左右は環体部との段差をはっきり表現する。

環体部 内孔は8.4×5.9cmの卵形を呈する。内孔面は非常にわずかな膨らみをもって内傾する。環体部は右の傾斜がやや大きいため中心軸がわずかに左へ傾く（4°）。環体部は上部にのみ平坦面を造り出す。

2 石製品

突起部 高さ1.7cmと細く、その下端が内孔下端よりわずかに上に取り付いて、やや上向きにのびる。突起部は上端が大きく突出し、下端はややすぼまる。横断面は半截蒲鉾形である。装飾は上から2突線、凸面、2突線の構成で、凸面の上下とも突線との境を沈線状に削り込んでいる。この装飾は表面から右側面、裏面へと連続し、環体部に近接するあたりで不明瞭になる。

板状部 左肩から下端まで7.4cmである。板状部と突起部との境は突起部下端に近接し、浅くU字形に挟っている。板状部左肩は環体部との境を明瞭に削り出す。左肩の裏面には2突線が削り出され、左側面までのびて凹凸を彫り出している。板状部の左側面と下端は直線的で、右側面は急な弧状を描いて下端に向けてすぼまる。下端は幅10.2cmで大きく開かない。

櫻井のNo.1（直系Ⅱ）、北條のNo.1（第一群B類3段階）として紹介されている。

裁23

淡灰緑色を呈する軟質の緑色凝灰岩製である（材質Ⅲ）。全体として角張っており、稜線をはっきり仕上げるが、起伏は乏しい。また、裏面の造作が省かれており、一見未製品のような印象を受ける。全長15.9cm、最大幅10.4cm、重さ235gで、本資料群中ではやや小さな個体である。全面に薄く土が被ったような状態で、板状部表面の一部に赤色顔料が付着する。5片を接合し、ほぼ完形に復元している。表裏面ともにキズや割れに伴う欠損、摩滅が目立つ。ただし、欠損以外に、加工痕も見られる。笠状部から環体部にかけては厚みがあり、笠状部下端で最大厚2.35cmである。板状部は急に薄くなり、下端に向かってやや薄くなりながら、縦方向に反る（9°）。また、笠状部も縦方向に反っていて、縦断面形は緩やかな弧状を呈する。各部位の境も匙面状に削り出している。裏面は笠状部の縦溝がなく、その他線刻等の装飾加工を一切行わないまま、表面同様に丁寧に研磨してわずかに凸面状をなした光沢面に仕上げている。

笠状部 わずかに左に傾き、横断面は長方形である。環体部は左右がほぼ対象であり、中心軸の傾き（3°）は笠状部が内孔からみて左に取り付く位置取りから来ている。摩滅のためやや不明瞭な部分もあるが、笠状部は車輪石の山式にあたる装飾で、2条の匙面の頂部に沈線（合計3条）をいれる。これは突起部の装飾と共通する。沈線は側面まで及ぶが、両端の接続部分にはわずかな食い違いが認められる。笠状部と環体部との境は表面、側面とも匙面状をなす。

環体部 内孔は6.55×5.4cmの卵形を呈する。内孔面は膨らみをもって内傾し、斜め方向の擦痕がよく残る。表面に平坦面は形成されていない。

突起部 下端が内孔下端よりわずかに上に取り付いて、水平にのびる。突起部は短く、上下で突出度に差はない。横断面はいびつな台形である。突起部の装飾は一部欠損するが、側面まで及んでいないと推定する。

板状部 左肩から下端まで6.8cmである。板状部と突起部の境はU字形に挟り、これを挟む右肩と突起部下端の先端部分は角をかき取っている。板状部左肩は小さく張り出すのみで、環体部との境に段差表現はない。板状部の左右側面は直線的にやや外に向かって開き、板状部下端で最大幅10.4cmに復元できる。下端は非常に緩やかな弧状に仕上げている。

櫻井のNo.2（傍系Ⅱ）、北條のNo.5（第2群B類3段階）として紹介されている。

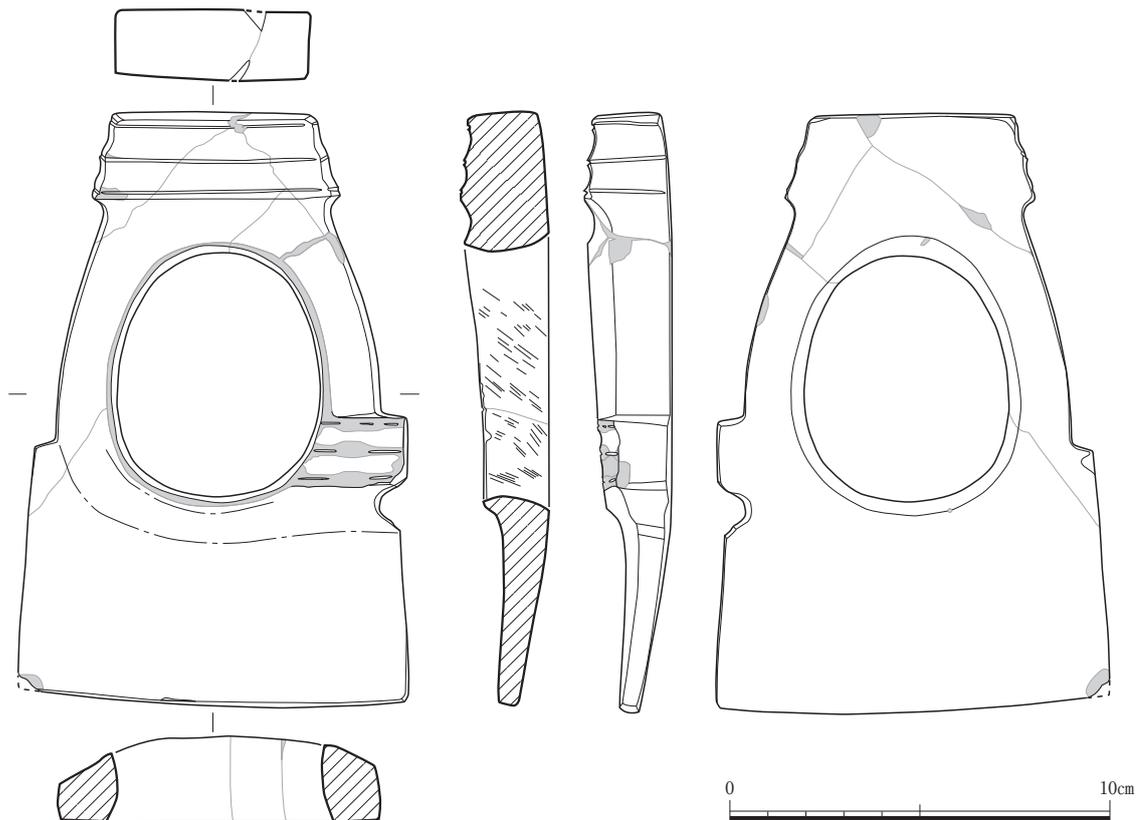


図8 裁23 鍬形石 (1 : 2)

裁24

淡灰青色を呈する軟質の緑色凝灰岩製である(材質Ⅳ)。全体に角張った仕上げで、稜線をはっきり仕上げ上げる。全長 19.35cm、最大幅 12.7cm、重さ 440g で、本資料群中では比較的大きな個体である。裏面には粘土、僅かな赤色顔料が付着するが、表面の付着物は顕著でない。板目状に葉理が観察できる。葉理は粗く、細かい粘土がその溝に入り込んでいる。表裏面ともに若干の剥離部分がある。2片を接合し、ほぼ完形に復元している。笠状部は大きく、また、環体部にかけて非常に厚みがある。笠状部下端で最大厚3.4cmである。板状部は薄くなり、下端に向かって急激に薄くなりつつ縦方向に反る(9°)。笠状部も縦方向にやや反っている。

笠状部 わずかに左に傾き、横断面はやや右側が肥大した隅丸蒲鉾形である。笠状部下端の左右側面は環体部との段差を大きく、はっきり表現する。笠状部の装飾は上から匙面、3条の稜線、匙面である。稜線は連続して笠状部を一巡する。裏面は笠状部下端が1条の突線状になり、これが笠状部と環体部の境をなす。裏面には断面半円形の縦溝が浅く彫られている。

環体部 内孔は7.35 × 5.2cmの卵形を呈する。内孔面はやや膨らみをもって内傾する。環体部は左の傾斜がやや大きく不均等なため、中心軸がわずかに左へ傾く(6°)。環体部平坦面は頂部から側部にかけて明瞭である。

突起部 下端が内孔下端と水平になる位置に取りつく。上端が突出し、下端に向かってすぼまる。横断面は半截蒲鉾形である。装飾は上から2突線、平滑面、2突線で、突線間は匙面状を呈し、上下の2

2 石製品

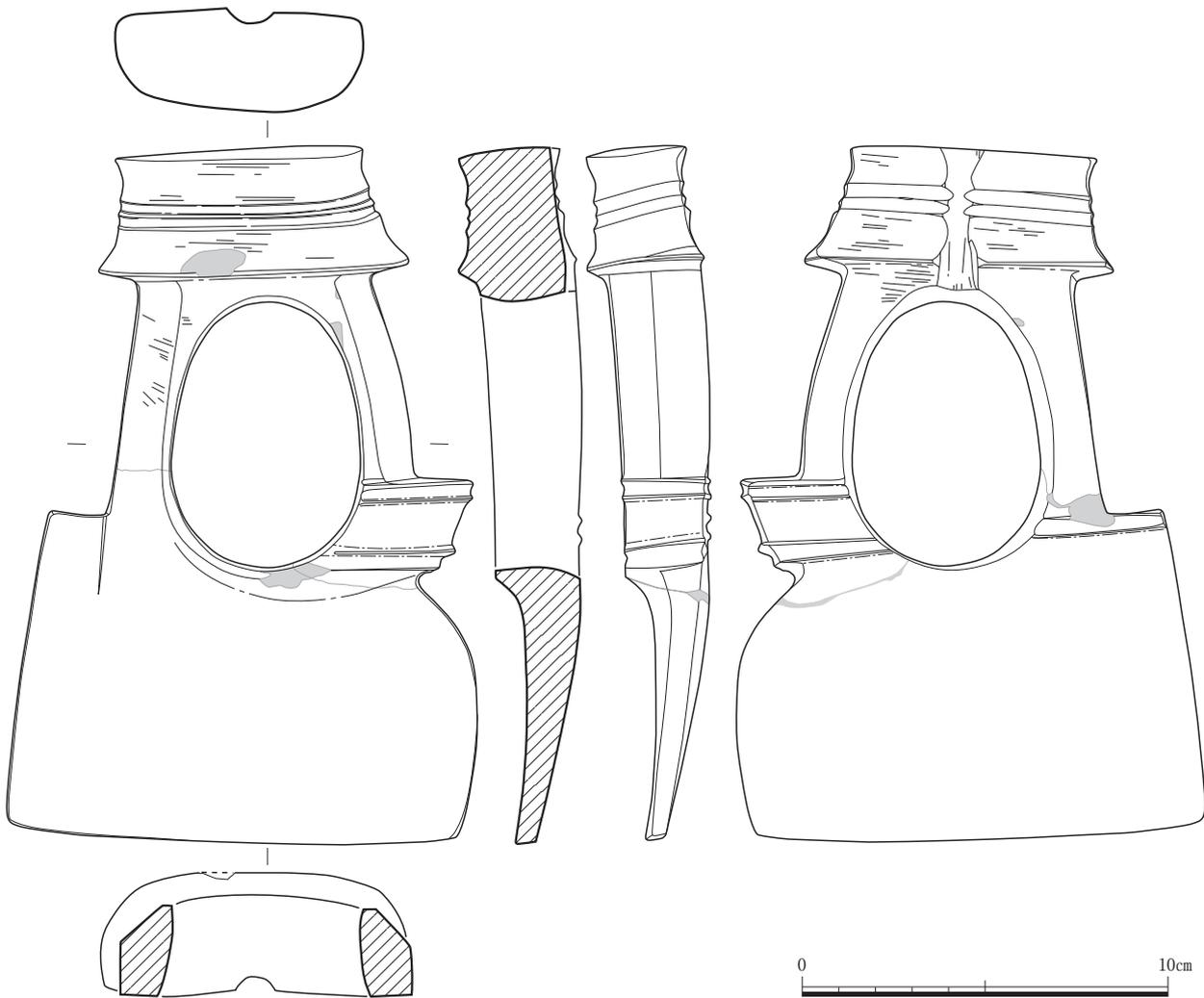


図9 裁24 鋏形石（1：2）

突線の間は平らに削られている。装飾は表面から右側面、裏面へと連続している。最下段の突線は一部で稜線状になっている。

板状部 左肩から下端まで9.0cmである。突起部との境はU字形に抉る。板状部左肩は環体部との境を明瞭に削り出す。板状部左肩は大きく張り出す。その裏面は2突線が削り出されるが、左側面には至らない。板状部左側面は平滑で、下端に向かって開きつつ直線的にのびる。右側面はやや急な弧状を描いて開き、広い板状部を形成する。下端はわずかに弧状を呈し、幅12.3cmである。

櫻井のNo.3（直系Ⅲ）、北條のNo.3（第一群B類4段階）として紹介されている。

裁25

淡灰緑色を呈する、硬質の緑色凝灰岩製である（材質Ⅳ）。全体に扁平であり、緩やかな丸みを持った仕上がりである。全長19.5cm、最大幅12.4cm、重さ465gで、本資料群中では比較的大きな個体である。明瞭ではないが、斜め方向に縞状に葉理が観察できる。表面は鉄分沈着により茶色に変色するが、赤色顔料の付着はほとんどない。裏面は全体に赤色顔料や粘土が顕著に付着する。3片を接合し、ほぼ完形に復元している。キズが目立つが、製作時に全体形を彫り出した際についたと見られる深いキズが所々

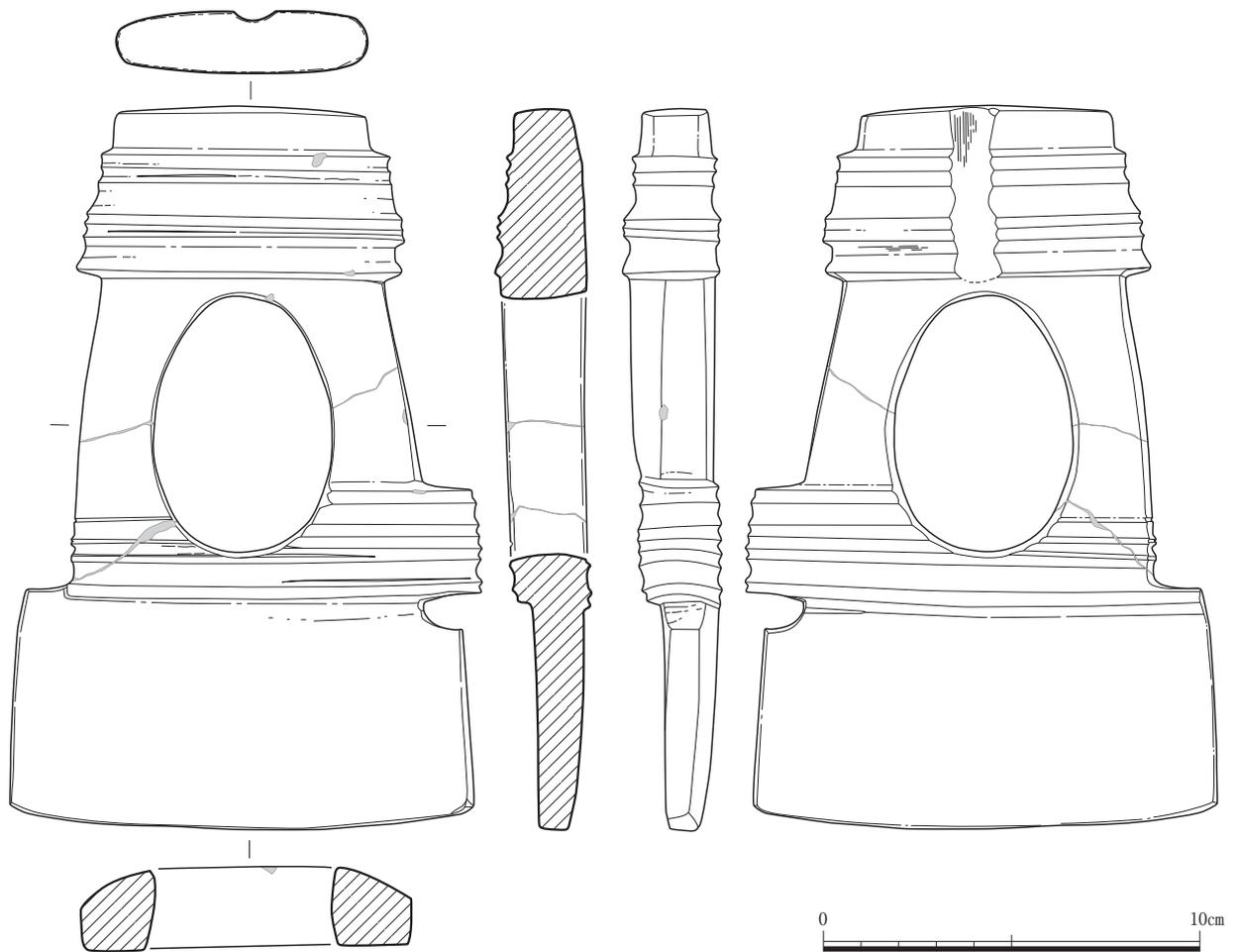


図10 裁25 鍬形石（1：2）

に残る。笠状部は非常に高さがあり、その下端で最大厚2.6cmである。ここから突起部にかけては厚く、笠状部は上端に向けやや薄くなる。板状部は少し薄く、下端に向かってやや薄くなりつつ、縦方向にわずかに反る（5°）。

笠状部 水平で、横断面は楕円形である。笠状部の装飾は上から平滑面、3稜線、匙面、3稜線、匙面で、匙面と稜線で構成される。装飾は連続して一巡する。裏面には断面半円形のごく浅い縦溝が掘られている。笠状部下端の稜線が環体部との境をなす。笠状部下端の左右側面は環体部との段差を大きく表現する。

環体部 内孔は全形に比して小さく、6.9×4.75cmの楕円形を呈する。内孔面はやや膨らみをもち、ほぼ直立する。環体部はほぼ左右対称で、中心軸は傾かない。

突起部 内孔の右下に取り付き、水平にのびる。突起部の上下で突出度の差はない。横断面は扁平なD字形（砲弾形）である。装飾は、4条の稜線を中央にその上下に幅の広い匙面、さらに外側に2稜線を配した構成で、内孔の右側と下を一巡する。一方、内孔の左側には3条の沈線が配されており、表面から左側面と続くが、装飾は左側面でわずかに食い違いが生じている。内孔を挟んで表面の装飾は連続しないが、左側最下の沈線は内孔右側までのびて途切れる。表面では板状部と環体部の境を表現するた

2 石製品

め、突起部から続く装飾を区切って段差を付ける。笠状部と突起部の装飾は数条の稜線と匙面を基調としており、一見帯を巻いたような外観を呈する。

板状部 板状部は左肩から下端まで6.4cmである。突起部との境を深く切先状に抉る。この部分は凹凸が残ったままで平滑に仕上げられていない。左肩はやや大きく張り出す。左右側面は直線的にやや開くが、下端は緩やかな弧状を呈す。ここで最大幅12.4cmである。

櫻井のNo.4（傍系Ⅱ）、北條のNo.8（第2群A類4段階）として紹介されている。

裁26

濃緑灰色を呈する、硬質の緑色凝灰岩製である（材質Ⅳ）。全体に扁平で丸みがあるが、稜線のはっきりした仕上げである。全長24.5cm、最大幅14.1cm、重さ660gで、本資料群中では最大の個体である。材質Ⅳの範疇としたが、他の個体に比して色調は濃く、質感も異なる。縞状の葉理が非常に顕著で、右から3分の1で葉理の変化線が縦に走る。遺存状態の極めてよい完形品である。表面に赤色顔料が付着する。突起部で最大厚2.2cmであるが、全長に比して厚みは薄く、また厚みの差は顕著でない。板状部は縦方向に反るが（10°）、これも厚みの範囲に収まる。

笠状部 水平で、非常に高さがある。横断面は楕円形である。笠状部は車輪石の山谷式にあたる装飾で、匙面を4条連ね、その谷と稜線部分に沈線を配す。装飾はほぼ連続して笠状部を一巡するが、沈線は裏面と左側面の境で食い違いが生じている。裏面には断面半円形の縦溝が彫られている。笠状部は明瞭な側面を形成していないが、左右側面の環体部との段差は明瞭で、匙面状をなす。笠状部と環体部の境は厚みの差がなく、装飾最下の沈線が境をなしている。

環体部 内孔は8.35×5.7cmの卵形を呈する。内孔面は膨らみをもってわずかに内傾する。環体部平坦面はやや不明瞭ながら表現されている。中心軸の傾きはない。

突起部 短く、その下端が内孔下端と水平になる位置に取りつく。突起部の上下で突出度の差はなく、中央がわずかに突出する。横断面は扁平なD字形（砲弾形）である。突起部の装飾は笠状部同様に匙面4条が連なり、表面から右側面、裏面まで連続する。この間、匙面の谷に沈線を配すのは上下の各1段のみである。裏面右側の装飾では、上段のみ沈線を施さず、下3条の匙面に沈線を配す。左側面とはやや不連続で、4条の稜線になる。さらにこれらの上に沿って太い沈線が刻まれている。裏面では板状部上部にも装飾が連続し、沈線が施されているが、これは側面には至らない。

板状部 左肩から下端まで10.15cmである。板状部境は深く隅のゆるい鉤状に抉る。板状部と環体部の境は平滑で、明瞭な境はない。板状部の左側面は直線的にのび、右側面と下端は非常に緩やかな弧状を描いて広い板状部を形成する。下端は幅13.8cmである。

櫻井のNo.5（傍系Ⅱ）、北條のNo.9（第2群A類4段階）として紹介されている。

裁27

淡灰緑色を呈する、極めて軟質の緑色凝灰岩製である（材質Ⅲ）。稜線をはっきり仕上げるが、全体としては匙面を主体とした丸みを帯びた仕上げで、各部位の境も弧状に削り出している。残存長14.6cm、残存最大幅11.1cm、現状の重さ170gで、本来の全体形を推測すると本資料群中では大きな個体といえる。研磨痕は他の個体と同様に見られるが、仕上げはやや甘く、細いヤリガンナ痕のような加工痕が部分的に残る。表裏面とも全体に粘土や土、僅かながら赤色顔料も付着する。外面は鉄分吸着により薄い茶色

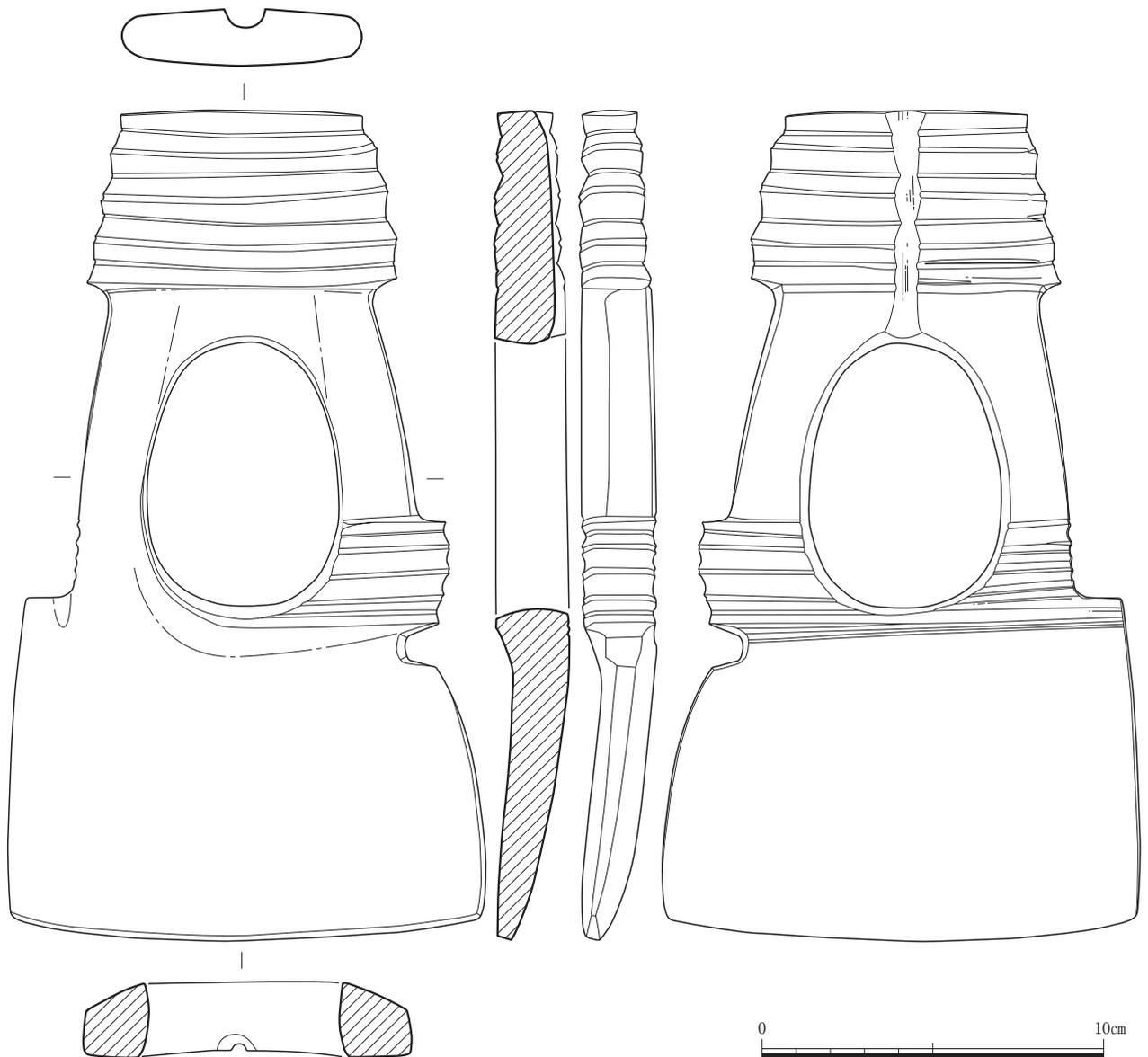


図11 裁26 鋏形石（1：2）

に変色している。板状部下半の大部分が欠損しており、3片を接合して現状に復元する。表裏面ともにキズや割れに伴う欠損、摩滅が目立つ。笠状部は非常に高さがあり、厚く、最大厚2.35cmである。板状部に向け徐々に薄くなり、縦方向に反る（5°）。ただし、縦断面は全体として緩やかな弧状を呈す。裏面は緩やかなカーブを持つ凸面状の光沢面に仕上げ、断面半円形の縦溝と突起部下方にのみ装飾を施す。

笠状部 高さがあり、横断面は隅丸蒲鉾形である。笠状部は車輪石の匙式にあたる装飾で、4条の匙面を均等に配す。最下段の稜線は突線状に太く、これが環体部との境をなし、明瞭な段差を造り出さない。装飾は両側と表面に連続するが、裏面には施さない。

環体部 内孔は6.3×5.3cmで大略楕円形を呈する。内孔面は膨らみがやや大きく、直立する。環体部平坦面は不明瞭ながら形成されている。

突起部 内孔の右下に取りつくようであるが、形状は遺存部分からは判然としない。突出度は低い。

2 石製品

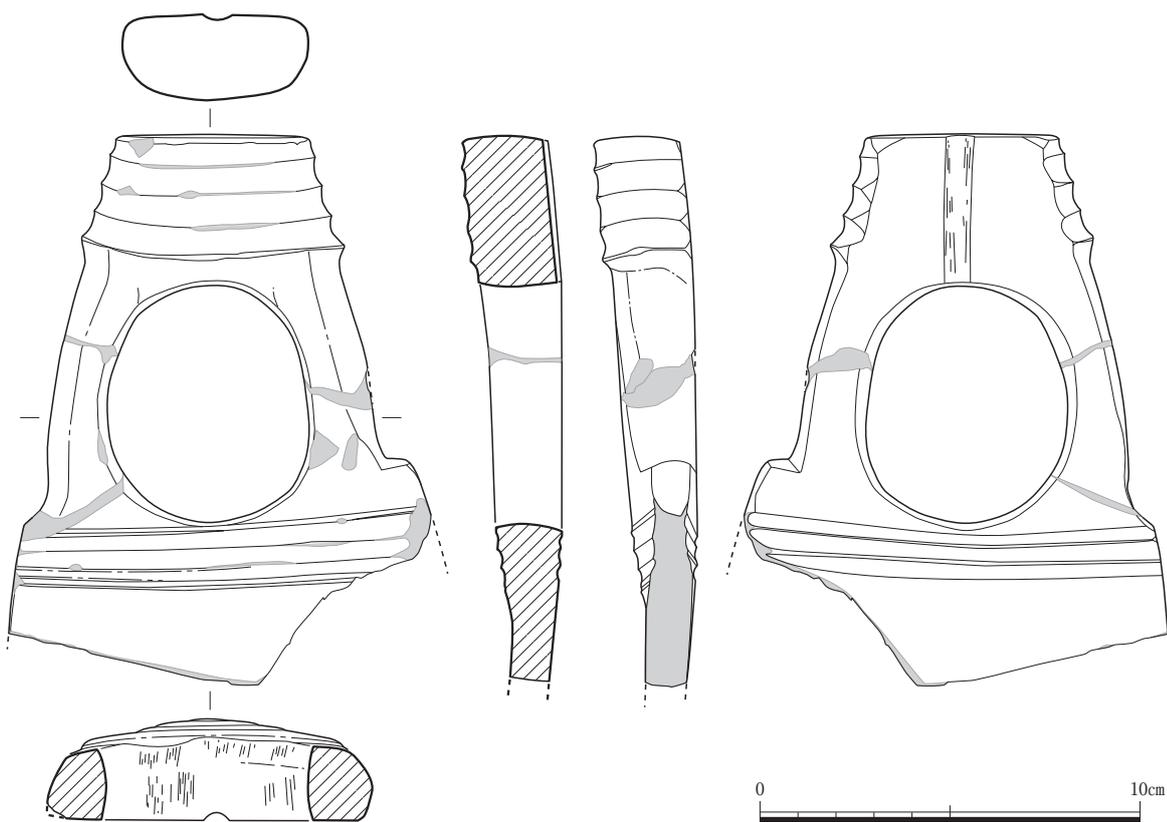


図12 裁27 鍬形石（1：2）

突起部の装飾は表裏に施され、板状部との境をなす。3条の匙面を配した装飾で、表面ではその上下にさらに細い沈線が配される。側面の遺存部分に装飾は見られず、連続性はない。

板状部 表面はわずかに凹面状をなす。環体部との境は装飾部分以外に段差はない。左肩は非常に狭い撫で肩で、わずかに張り出す。

櫻井No.6（傍系Ⅱ）、北條のNo.6（第2群B類4段階）として紹介されている。

裁28

淡灰緑色を呈する、硬質の緑色凝灰岩製である（材質Ⅳ）。全体として薄く扁平であり、角の仕上げは鋭い。全長16.05cm、残存最大幅9.7cm、重さ150gで、本資料群中では小さめの個体である。葉理が斜め方向に観察できる。外面は全体に薄く土がぶつたような状態で赤色顔料と粘土が付着するが、内孔から裏面にかけての赤色顔料の付着はより顕著である。4片を接合して現状に復元する。板状部は長さが判明するものの、約3分の1を欠失している。笠状部で最大厚1.5cmであるが、突起部でも厚さ1.3cmある。板状部は縦方向（前方）に直線的に反る（7°）が、これも個体の厚みの範囲に収まる。

笠状部 わずかに左に傾き、平面は均整な台形を呈す。横断面はやや隅丸の平行四辺形状である。笠状部の装飾は上から匙面2条、2沈線、匙面2条の構成で、各匙面の境は突線になっている。装飾は笠状部を一巡するが、突線は低く不明瞭になる部分がある。裏面には断面半円形の浅い縦溝が直線的に彫られる。下端は表裏面では環体部との境を広い匙面状に削り出すが、厚みの差は小さい。左右側面では環体部との段差を非常に大きく表現する。

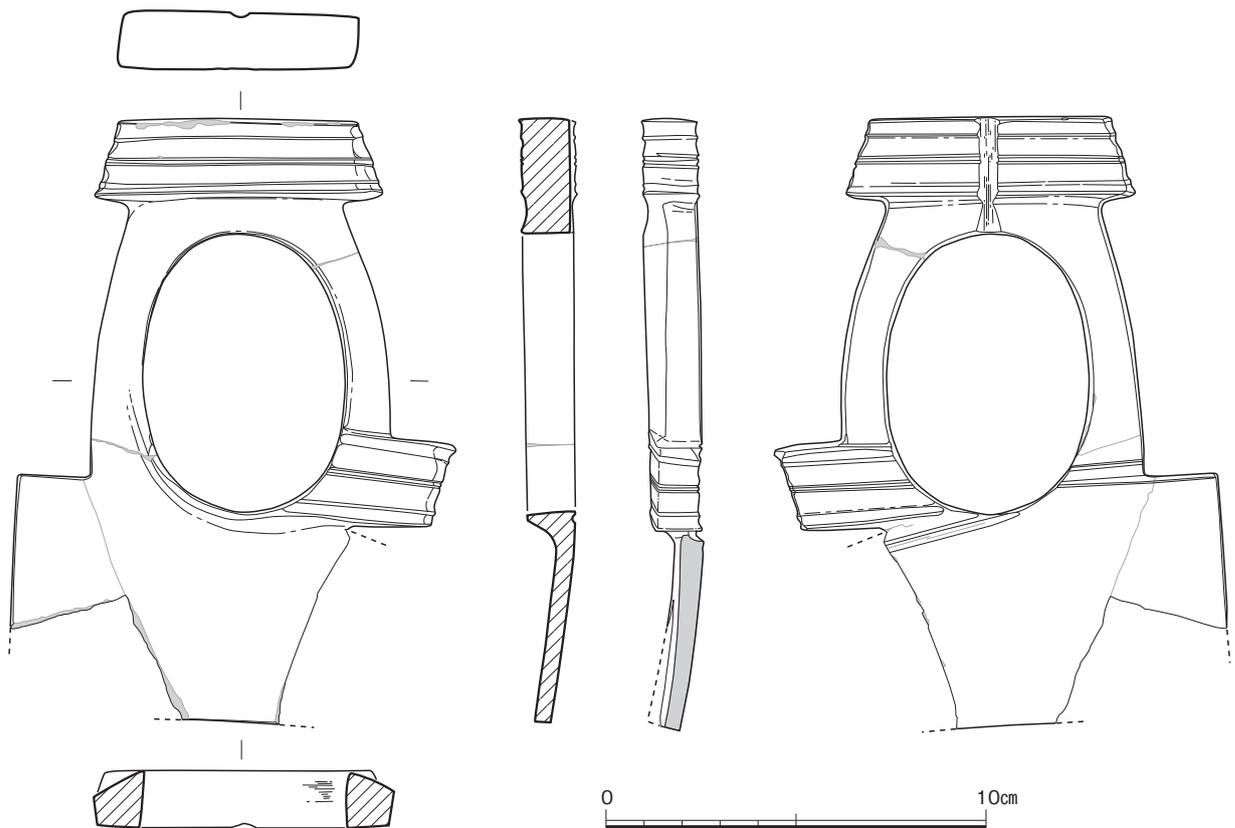


図13 裁28 鋏形石（1：2）

環体部 傾斜部の傾きはほぼ左右対称である。内孔は7.4×5.3cmの楕円形を呈する。内孔面の膨らみは非常にわずかで、直線的に内傾する。内孔面の上部には、不明瞭だが横方向の擦痕が残る。中心軸はわずかに左へ傾く（3°、遺存部分から判断）。

突起部 下端が内孔下端横になる位置にやや下向きに取り付く。突出度が大きく、上端がさらに大きく突出する。横断面はいびつな台形を呈する。装飾は笠状部と同じ構成であるが、上から2段目の匙面は突起部の先端に向かって形状を変え、凸面状になる。装飾は連続するものの、突線は太さ・凹凸が一定でない。中間の2沈線に繋がるように左肩の裏面には沈線が削り出され、その上にあたる環体部裏面には沈線と突線が接して刻まれている。また、板状部裏面の突起部下方に斜め方向の突線が削り出されている。

板状部 左肩から下端まで6.4cmである。厚さ0.5cm前後と非常に薄い。板状部と環体部境には段差を表現しない。板状部左肩は大きく張り出す。

櫻井のNo.7（傍系Ⅰ）、北條のNo.7（第2群A類3段階）として紹介されている。

裁29

淡灰緑色を呈する、極めて軟質の緑色凝灰岩製である（材質Ⅲ）。ただし、全面に鉄分吸着しているようで、外面は明オリーブ灰色に変色している。全体として扁平で、丸みを帯びた仕上がりである。全長11.45cm、最大幅7.4cm、現状の重さ40g^{註9}で、本資料群中では極端に小さな個体である。現在知られ

2 石製品

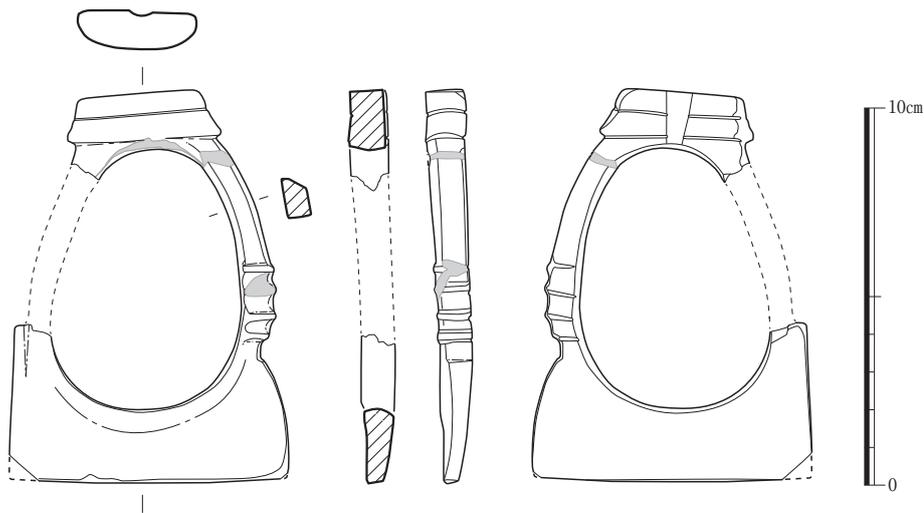


図14 裁29 鍬形石（1：2）

他の出土例と比しても小型といえることから、意図して製作された小型品と判断できる。全体に摩滅や欠損が目立ち、環体部左側が欠損しており、現状は石膏復元である。このほか環体部右側の一部と、環体部と突起部の境も石膏復元による。このため、笠状部はもう少し傾く可能性も指摘されている〔小田木2010〕。また、板状部下端の両端は欠失している。外面には全面に赤色顔料の混じった粘土が付着している。笠状部で最大厚1.2cmであるが、突起部でも厚さ0.9cm前後である。板状部は縦方向（前方）に反る（10°）が、これも個体の厚みの範囲に収まる。

笠状部 やや左へ傾き、平面台形を呈して上部がすぼまる。横断面は隅丸蒲鉾形である。両側面から表面にかけてわずかに傾斜を持った匙面を形成し、中央に施された1条の沈線が笠状部を一巡する。沈線は裏面と右側面との沈線接続部分でわずかに食い違いが生じている。裏面はやや膨らみをもった凸面状をなし、環体部との境に1条の沈線を加えるが、段差はない。裏面に彫られた断面半円形の浅い縦溝は上端が太く、環体部に向け細くなる。笠状部下端の左右は環体部との境を低い段差で表現する。

環体部 内孔は7.0×4.9cmであり、やや歪んだ卵形を呈する。全長に対し6割に達する大きさである。内孔面はやや膨らみをもって内傾し、中心軸はわずかに左へ傾く（5°）。

表1 鍬形石計測表

裁判番号	器種	長(cm)	最大幅(cm)	板状部長(cm)	板状部下端幅(cm)	最大厚(cm)	内孔径(cm)	重量(g)	色調	備考	材質
裁21	鍬形石	19.4	11.3	9.4	10.9	2.7	8.05×5.5	340	淡灰緑色		Ⅲ
裁22	鍬形石	17.3	10.7	7.4	10.2	2.4	8.4×5.9	240	淡灰緑色		Ⅳ
裁23	鍬形石	15.9	10.4	6.8	[10.4]	2.35	6.55×5.4	235	淡灰緑色		Ⅲ
裁24	鍬形石	19.35	12.7	9.0	12.3	3.4	7.35×5.2	440	淡灰青色		Ⅳ
裁25	鍬形石	19.5	12.4	6.4	12.4	2.6	6.9×4.75	465	淡灰緑色		Ⅳ
裁26	鍬形石	24.5	14.1	10.15	13.8	2.2	8.35×5.7	660	濃緑灰色		Ⅳ
裁27	鍬形石	(14.6)	(11.1)	-	-	2.35	6.3×5.3	170	淡灰緑色		Ⅲ
裁28	鍬形石	16.05	(9.7)	6.4	-	1.5	7.4×5.3	150	淡灰緑色		Ⅳ
裁29	鍬形石	11.45	7.4	4.2	[7.3]	1.2	7.0×4.9	40	淡灰緑色	表面淡褐色に変色	Ⅲ

() 残存値 [] 復元値

突起部 内孔右横の、高い位置に突線のみが突出したような形状で取り付く。装飾は4条の太い突線とその間の匙面で構成され、これは表面から側面に続くが、裏面は平滑で、突線の位置に合わせて4条の沈線が彫られている。突起部の横断面は半截蒲鋒形である。板状部との境はごく浅く鉤状に決る。

板状部 左肩から下端まで4.2cmである。ただし、内孔の下端から板状部下端までは1.95cmであり、非常に狭い板状部になっている。板状部と環体部境の境には明瞭な段差を造り出す。板状部の左肩はわずかに張り出す。左側面、下端は直線的である。右側面は緩やかな弧状を描いており、下端に向かってやや広がる。下端は幅7.3cmに復元できる。

小田木の9として紹介されている [小田木2010]。

外面付着物および遺存状態

裁21は外面の付着物が少なく、残る個体とは現状をやや異にする。一方、裁22～29は顕著な赤色顔料と粘土の付着が認められる。また、裁22、26がほぼ完形であるのを除くと、他の裁23～25、27、28は欠損がみられたり、数片に割れていたりすることや盗掘時についたと思われるキズが目立つ点で遺存状態に共通点が見られる。 (高木清生)

2 車輪石

外形・内孔形について、長径と短径の差が5mm未満のものを円形、それ以上のものを卵形とする。底面は、環体外側と内側の高さの差が3mm未満をやや上底、それ以上を上底と表記した。また、朱の表裏における付着量の差はカッコ内に不等号を用いて表した。

裁30

淡緑色を呈し、軟質で軽い緑色凝灰岩である (材質Ⅲ)。表裏に若干の赤色顔料 (表>裏) と粘土が付着している。外形・内孔形ともに卵形である。外斜面に最大幅約1.7cmの匙面が放射状に巡る。匙面の中央および両肩に沈線がある。内面は直線的に内傾する。縦方向の擦痕に切られる形で、回転運動に起因すると推定される条痕が残る。底面は上底で、環体内側が外側より約4mm高い。また、側面から見ると、環体の上端が、下から上へ向けて低くなる。

裁31

淡灰緑色を呈し、軟質の緑色凝灰岩である (材質Ⅲ)。表面の約半分に光沢が残る。表裏に若干のぶい色の赤色顔料 (裏>表) と粘土が付着する。外形が卵形、内孔形が円形である。外斜面に最大幅約1.6cmの匙面が放射状に巡る。匙面は、立ち上がりが急で、深い。内面は直線的に内傾し、上端に緩い面取りを施す。底面はやや上底で、環体内側が外側より約2.5mm高い。

裁32

淡灰緑色を呈し、やや硬質の石材である。材質Ⅰ・Ⅲ・Ⅳのいずれとも異なることから、材質Ⅱとした。やや光沢をもつ。表に若干のぶい色の赤色顔料、裏に黄色系粘土が付着している。外形が卵形、内孔形が円形である。外斜面に最大幅約2.5cmの匙面が放射状に巡る。匙面は、立ち上がりが緩く、扁平である。内面はやや内傾する。回転運動に起因すると推定される深い条痕が残る。底面は上底で、環体内側が外側より約3mm高い。

2 石製品

表2 車輪石計測表

番号	器種	長×幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	内孔径(cm)	外形	内孔形	底面形状	斜面+刻み	条数	材質
裁30	車輪石	10.4 × 9.4	1.1	35	4.9 × 4.35	卵形	卵形	上底	匙面+山谷	19	Ⅲ
裁31	車輪石	11.2 × 10.8	1.5	120	5.5	卵形	円形	やや上底	匙面	24	Ⅲ
裁32	車輪石	12.6 × 11.5	1.7	200	5.5	卵形	円形	上底	匙面	17	Ⅱ
裁33	車輪石	13.3 × 11.8	1.5	215	5.8	卵形	円形	やや上底	匙面+山谷	14	Ⅱ
裁34	車輪石	12.4 × 12.0	1.4	150	5.3	円形	円形	上底	匙面	22	Ⅲ
裁35	車輪石	11.9 × 10.5	1.2	60	6.0 × 5.4	卵形	卵形	上底	匙面+山谷	16	Ⅲ
裁36	車輪石	11.5 × 10.55	1.5	110	5.2	卵形	円形	やや上底	匙面	27	Ⅲ
裁37	車輪石	13.75 × 11.15	1.4	135	5.5	卵形	円形	上底	匙面+山	24	Ⅲ
裁38	車輪石	10.4 × 10.1	1.35	100	5.1	円形	円形	やや上底	匙面	20	Ⅱ
裁39	車輪石	10.75 × 10.75	1.4	80	5.35	円形	円形	上底	匙面	24	Ⅲ
裁40	車輪石	11.1 × 11.1	1.4	90	5	円形	円形	やや上底	匙面	29	Ⅲ
裁41	車輪石	10.0 × 10.0	1.3	60	5.5	円形	円形	上底	匙面+山谷	21	Ⅲ
裁42	車輪石	11.1 × 11.1	1.65	165	4.85	円形	円形	平坦	匙面+山谷	16	Ⅳ
裁43	車輪石	10.3 × 10.3	1.3	130	4.6	円形	円形		匙面+谷	表) 21 裏) 21	Ⅳ
裁44	車輪石	11.3 × 11.6	1.8	245	4.6	円形	円形		匙面+谷	表) 19 裏) 19	Ⅳ
裁45	車輪石	11.8 × 11.5	1.65	215	5.4 × 5.6	隅丸方形	円形		匙面+谷	表) 32 裏) 32	Ⅳ
裁47	車輪石	10.6 × 10.4	1.45	105	5.85	円形	円形	ほぼ平坦	特殊	54	凝灰岩?

裁33

淡灰緑色を呈し、硬質の石材である。材質Ⅱとした。手に持った印象は、重く感じる。全面に光沢がある。表裏に鮮やかな色の赤色顔料（表＝裏）と粘土が付着する。外形が卵形、内孔形が円形である。外斜面に最大幅約1.4cmの匙面が放射状に巡る。匙面の両肩に沈線がある。外側面に横方向の擦痕が残る。内面はやや膨らみをもって直立する。斜上する擦痕に切られる形で、回転運動に起因すると推定される条痕が残る。底面はやや上底で、環体内側が外側より約2mm高い。

裁34

淡灰緑色を呈し、軟質の緑色凝灰岩である（材質Ⅲ）。裏面の一部に光沢がある。表裏に若干の濃い色の赤色顔料（裏＞表）と粘土が付着する。外形・内孔形ともに円形である。外斜面に最大幅約2.1cmの匙面が放射状に巡る。外側面に横方向の擦痕が残る。内面はやや膨らみをもって直立する。弱いながら、不定方向の擦痕が残る。底面は上底で、環体内側が外側より約3mm高い。

裁35

淡灰緑色を呈し、軟質の緑色凝灰岩である（材質Ⅲ）。裏面の一部に光沢がある。表は半分、裏はまばらに鮮やかな色の赤色顔料が付着する。外形・内孔形ともに卵形である。外斜面に最大幅約1.3cmの匙面が放射状に巡る。匙面の中央および両肩に沈線がある。内面はやや膨らみをもって内傾する。底面は上底で、環体内側が外側より約5mm高い。

裁36

淡灰緑色を呈し、軟質の緑色凝灰岩である（材質Ⅲ）。表裏に鮮やかな色の赤色顔料（表＞裏）と粘土が顕著に付着する。外形が卵形、内孔形が円形である。外斜面に最大幅約1.4cmの匙面が放射状に巡る。内面はやや膨らみをもって直立する。横方向の擦痕と、穿孔時についたであろう稜が残る。底面はやや上底で、環体内側が外側より約2mm高い。

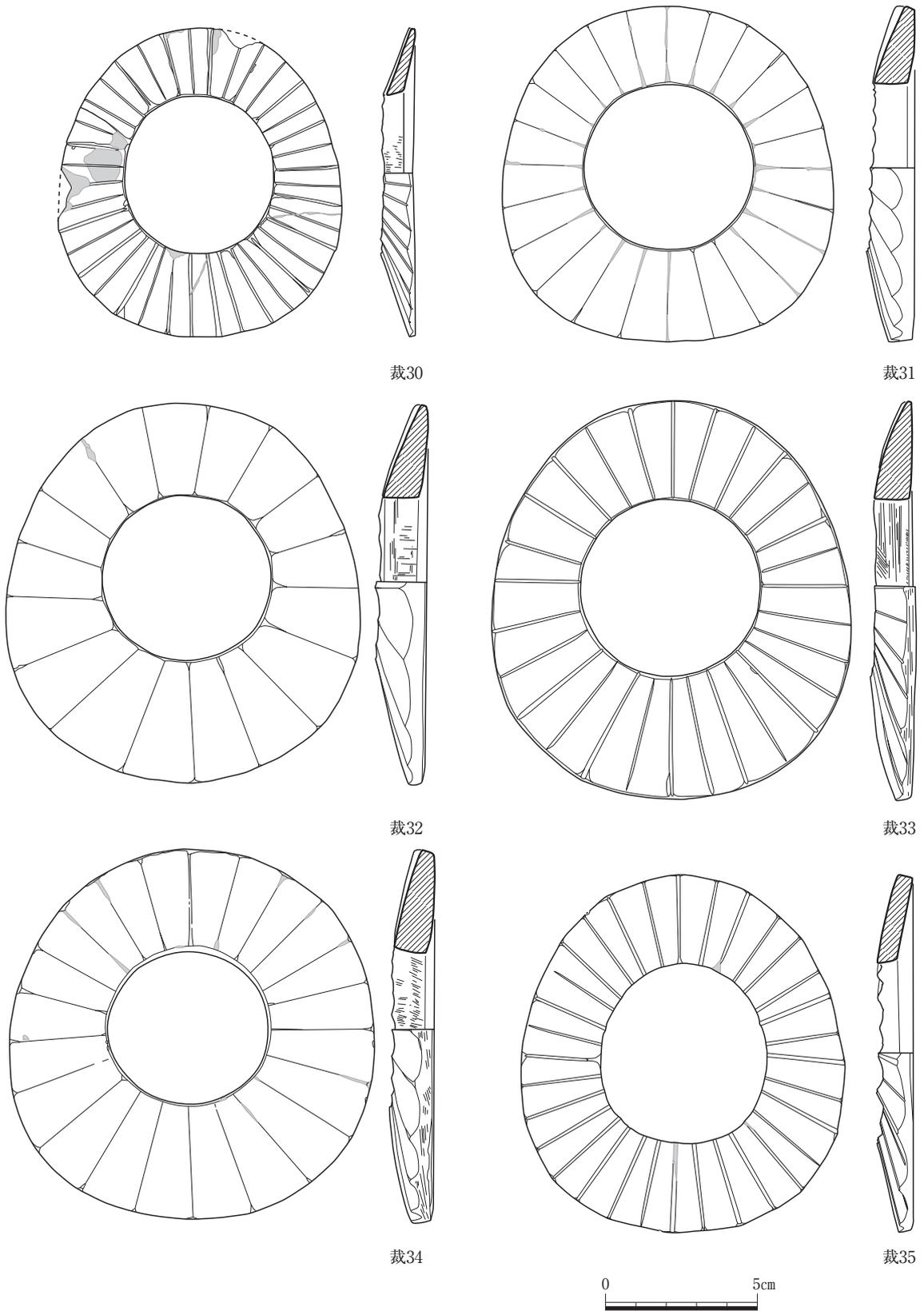


図15 裁30 - 35 車輪石 (1 : 2)

2 石製品

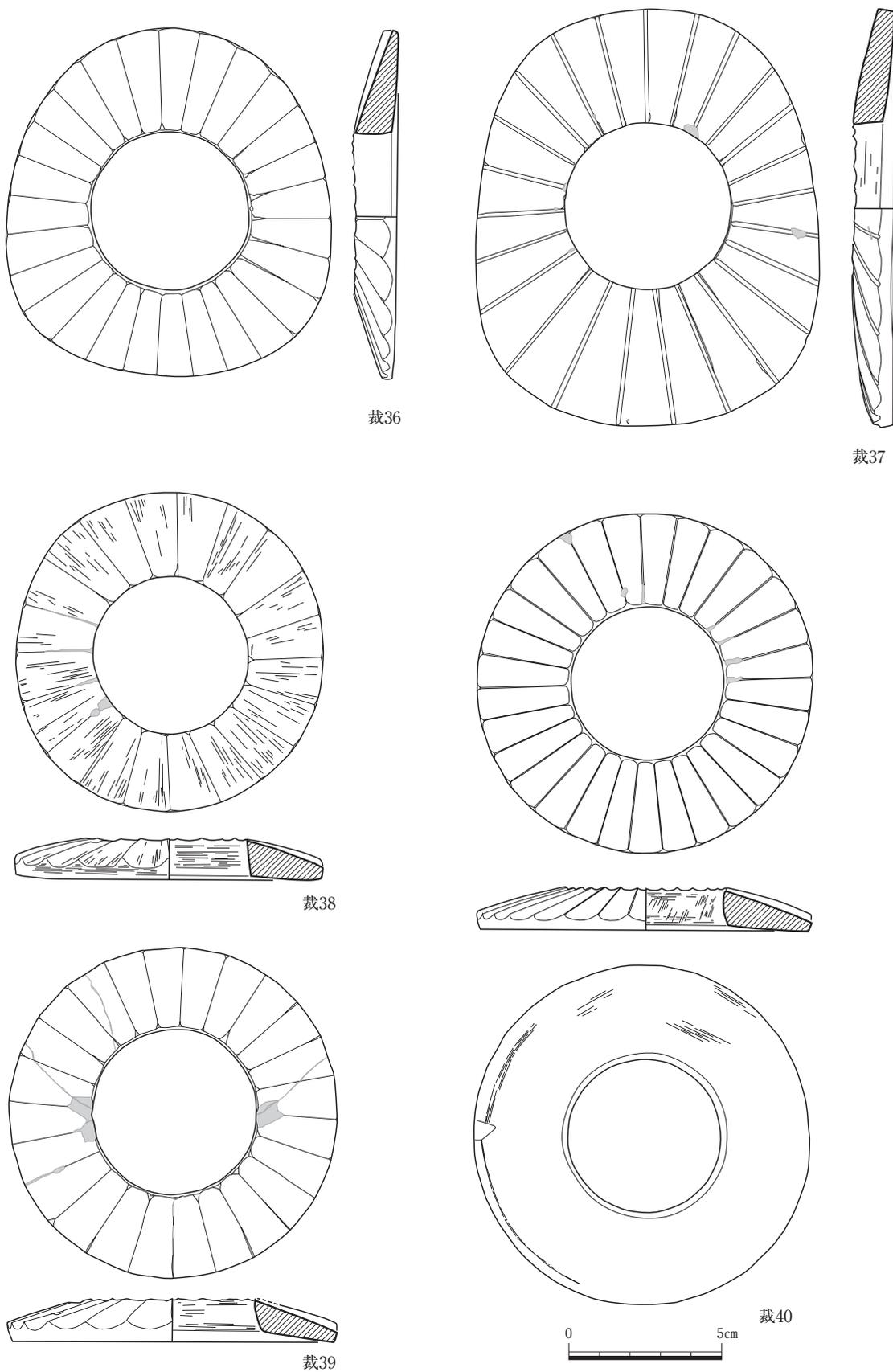


图16 裁36 - 40 車輪石 (1 : 2)

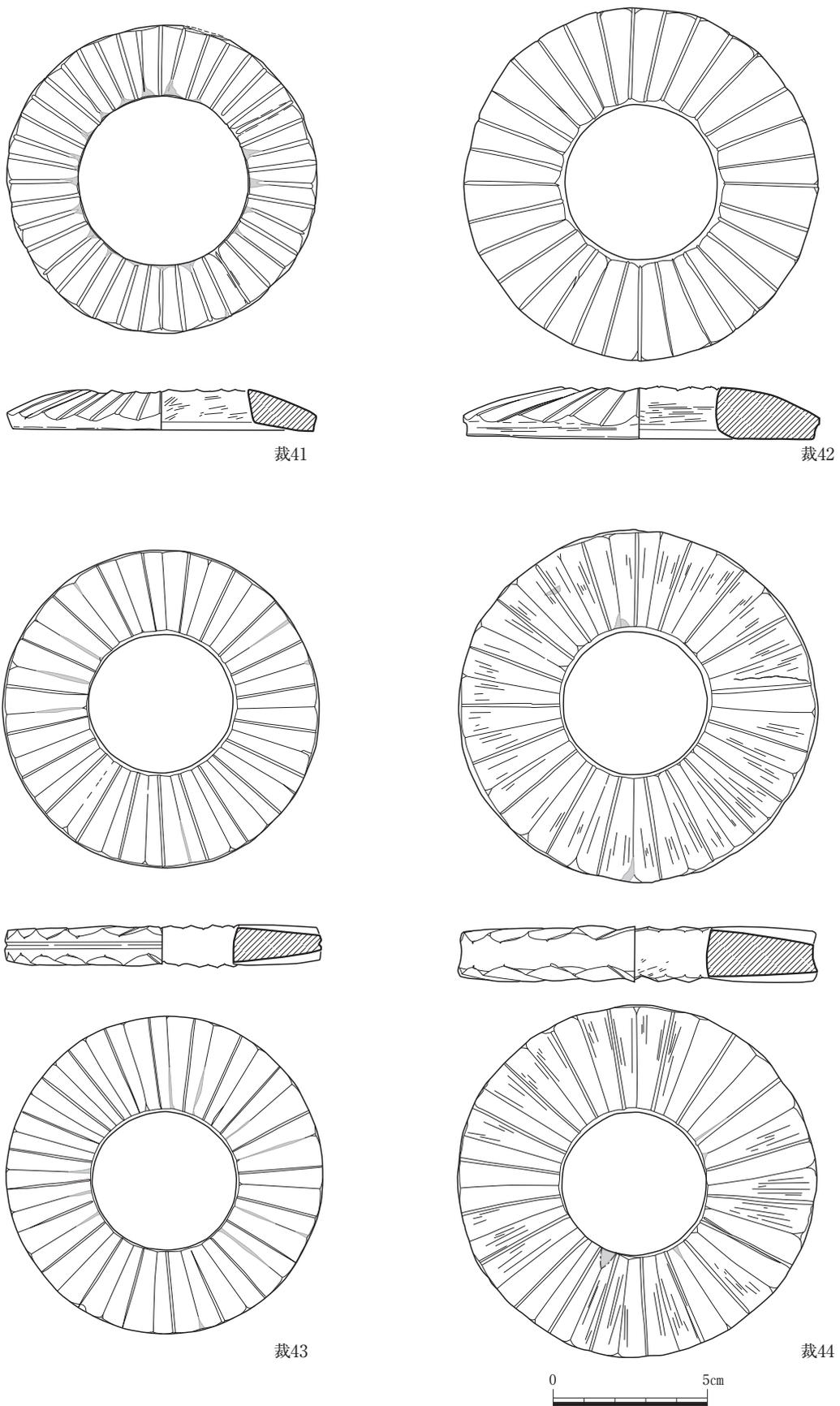


図17 裁41 - 44 車輪石 (1 : 2)

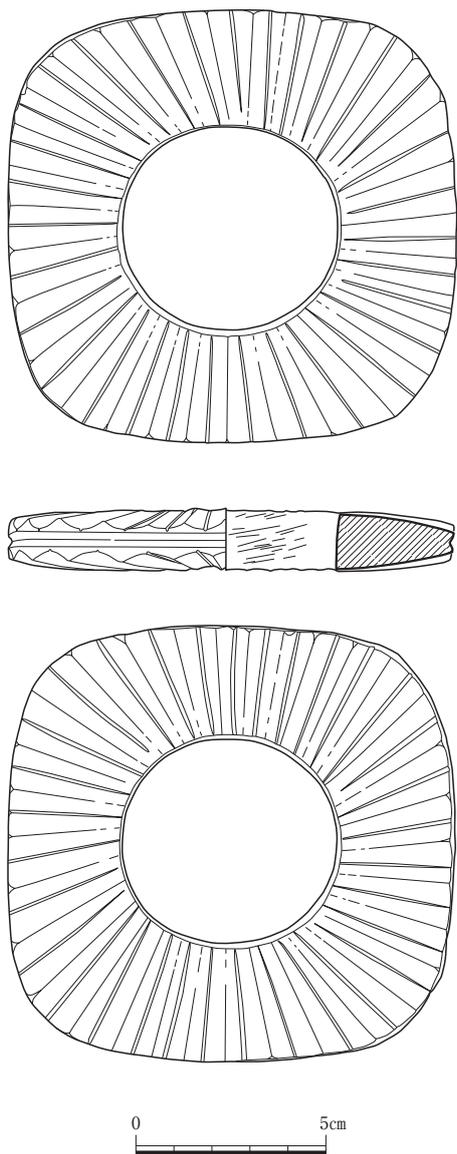


図18 裁45 車輪石 (1 : 2)

内孔形ともに円形である。外斜面に最大幅約 1.2cmの匙面が放射状に巡る。匙面は立ち上がり急で、深い。また、匙面を区切る稜はにぶい。内面はやや内傾し、中位で膨らむ。回転運動に起因すると推定される擦痕および不定方向の擦痕が残る。底面はやや上底で、環体内側が外側より約 2 mm高い。また、底面には縁から約 4 mmの位置に 1～3本の線刻があるが、装飾を意図した線刻というよりも、成形時の罫描き線との印象が強い。弱いながら擦痕が観察できる。

裁41

淡灰緑色を呈し、軟質の緑色凝灰岩である (材質Ⅲ)。風化が進行している。赤色顔料などの付着物は見られない。外形・内孔形ともに円形である。外斜面に最大幅約 1.3cmの匙面が放射状に巡る。匙面の中央および両肩に沈線がある。内面は直線的に内傾する。弱いながら不定方向の擦痕を残す。底面は上底で、環体内側が外側より約 3 mm高い。

裁37

やや黒ずんだ灰緑色を呈し、軟質の緑色凝灰岩である (材質Ⅲ)。やや光沢がある。赤色顔料などの付着物はない。外形は卵形、内孔形は円形である。外斜面に最大幅約 1.9cmの匙面が放射状に巡る。匙面の両肩に沈線がある。内面は直線的に内傾する。横方向の擦痕が残る。底面は上底で、環体内側が外側より約 3.5mm高い。

裁38

淡灰緑色を呈し、やや軟質の緑色凝灰岩である。材質Ⅲほど軟質ではないため、材質Ⅱとした。表には全体的に鮮やかな色の赤色顔料が付着するが、裏にはほとんどない。外形・内孔形ともに円形である。外斜面に最大幅約 1.7cmの匙面が放射状に巡る。外側面に成形時の擦痕が残る。内面は直線的に内傾する。不定方向の擦痕が残る。底面はやや上底で、環体内側が外側より約 1.5mm高い。

裁39

淡緑色を呈し、軟質の緑色凝灰岩である (材質Ⅲ)。全体的に光沢がある。表のみわずかに鮮やかな色の赤色顔料が付着するが、ほとんど付着物は認められない。外斜面に最大幅約 1.5cmの匙面が放射状に巡る。匙面を区切る稜の頂部は鋭い。内面はやや膨らみをもって内傾する。回転運動に起因すると推定される擦痕が残る。底面は上底で、環体内側が外側より約 4 mm高い。

裁40

淡灰緑色を呈し、軟質の緑色凝灰岩である (材質Ⅲ)。表裏にわずかにぶい色の赤色顔料が付着する。外形・

裁42

淡灰緑色を呈し、硬質の緑色凝灰岩で、木目状の特徴的な葉理がある（材質Ⅳ）。表裏に鮮やかな色の赤色顔料（表＞裏）と粘土がわずかに付着する。外形・内孔形ともに円形である。外斜面に最大幅約2cmの匙面が放射状に巡る。匙面の中央および両肩に沈線がある。外側面に1条の匙面帯が横方向に巡る。匙面帯には横向きの擦痕が残る。内面は内傾し、下部で膨らむ。横方向の擦痕が残る。底面は平坦である。

裁43

淡灰緑色を呈し、硬質の緑色凝灰岩で、木目状の特徴的な葉理がある（材質Ⅳ）。全面ににぶい色の赤色顔料（表＝裏）と粘土が付着する。外形・内孔形ともに円形である。表裏両面の外斜面に最大幅約1.4cmの匙面が放射状に巡る。匙面の中央に沈線がある。外側面に沈線が巡る。内面はやや膨らみをもって直立する。

裁44

淡灰緑色を呈する緑色凝灰岩で、木目状の特徴的な葉理がある（材質Ⅳ）。裁43と材質、色、装飾、その他特徴が非常に類似する。外形・内孔形ともに円形である。表ににぶい色、裏に鮮やかな色の赤色顔料（裏＞表）と粘土が付着する。表裏両面の外斜面に最大幅約1.5cmの匙面が放射状に巡る。匙面の中央に沈線がある。外側面は1条の匙面帯が横方向に巡る。内面はやや膨らみをもって直立する。土が付着し、加工痕が観察できない。

裁45

淡灰緑色を呈する硬質の緑色凝灰岩で、やや不明瞭だが木目状の特徴的な葉理がある（材質Ⅳ）。外形が隅丸方形、内孔形が円形である。表裏ににぶい色と鮮やかな色の赤色顔料（表＞裏）が混じり、粘土が付着する。表裏両面の外斜面に最大幅約1cmの匙面が放射状に巡る。匙面の中央に沈線がある。外側面に1条の匙面帯が横方向に巡る。内面は直線的に外傾する。斜上する擦痕を残す。

裁47

灰白色を呈し、軟質の石材である。凝灰岩製かと目されるが、はっきりしない。表面は粗くざらついているが、一部に光沢がある。表裏にはほとんど付着物がないが、内孔面にわ

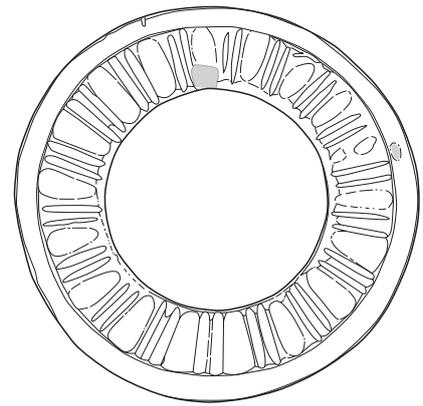


図19 裁47 車輪石（1：2）

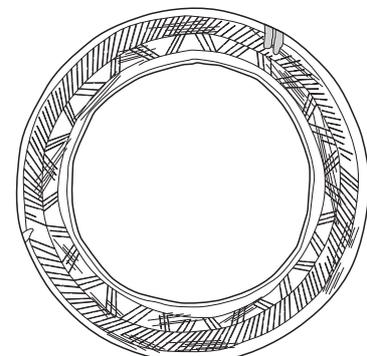
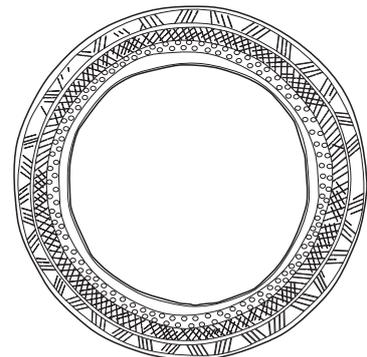


図20 裁46 石釧（1：2）

2 石製品

ずかな赤色顔料と粘土が付着する。外形・内孔形ともに円形である。外斜面に最大幅約9mmの匙面が放射状に巡る。匙面の両肩に、2本1組の沈線がある。また、匙面の外側は約2mmの段をもって薄くなる。外側面は遺存状況が悪いが、1条の匙面帯が横方向に巡る。内面は直線的に内傾する。底面はほぼ平坦だが、環体内側でやや上底となる。(村瀬 陸)

3 石 釧

装飾の分類呼称や型式名は、蒲原宏行分類〔蒲原1987〕にしたがう。

裁46

灰緑色を呈する。石材は、軟質の質感をもつ滑石である。外斜面・外側面・底面に線刻および刺突の組合せからなる装飾がある。外斜面の装飾は、内側から順に2重の刺突、斜格子状の線刻、二重圏線、4本1組の斜線、二重圏線である。刺突は直径約1.5mm、深さ0.5mm未満で、先端が鈍い工具を用いて、回転させながら施される。線刻は幅約0.5mm、深さ0.5mm未満で、先端の尖った工具で施される。外側面は直線的に外傾する。3本の沈線が巡り、その内部に矢羽根状の線刻が施される。沈線のうち中央のものは、装飾というよりも割り付け時の野描き線との印象が強い。底面は内側に向けて上底となり、環体内側が外側よりも約2mm高い。3本の圏線で区画され、その内部に3本1組の斜線と、同一方向に連続する斜線とが線刻される。

内面はほぼ直立する。刃物を用いて、円弧に沿って削り出した痕跡を明瞭に残す。そして、刃物による削り出しに切られる形で、縦方向の浅い線状の窪みが、約1cm間隔で並ぶ。これは、内面を削り抜く際に円周上に穿孔を施した可能性を窺わせる。

同様のことが、外側面についても指摘できる。それを反映して、本例の外形は正円を指向するものの滑らかな円弧とはなっていない。また、外斜面および底面には、装飾に切られる形で、短い単位で円弧に沿って動く擦痕が観察できる。

以上の諸点から、本例は回転性の道具を用いず、手持ちで削り出して成形したことが理解できる。特に、内面の削り抜きに際しては、円周上に約1cm間隔で穿孔を施した上で内部を抜き取った可能性が指摘できる。

なお、全面的に線刻の内部に赤色顔料が付着する。

裁48

暗緑色を呈する。石材は、重く、硬い質感をもつ石材で、材質Ⅱとした。外斜面に櫛歯状装飾が放射状に巡る。櫛歯状装飾は、幅約1mmで断面蒲鋒形の凸部と、幅約1mmで断面U字形の凹部とが反復する、a1種刻みである。外側面に1条の匙面帯が横方向に巡る。これらの形態的特徴から、Ⅱ-a型式に該当する。外斜面と外側面との境に、成形時の割り付けに起因すると推定される浅い沈線が巡る。内面はやや膨らみをもって直立する。回転運動に起因すると推定される深い条痕が残る。底面は水平な平坦面である。なお、外面に赤色顔料が付着する。

裁49

暗緑色を呈する。石材は、木目状の特徴的な葉理がある緑色凝灰岩である(材質Ⅳ)。手に持った印象は、実際の重量よりも重く感じる。外斜面に櫛歯状装飾が放射状に巡る。櫛歯状装飾は、断面台形の

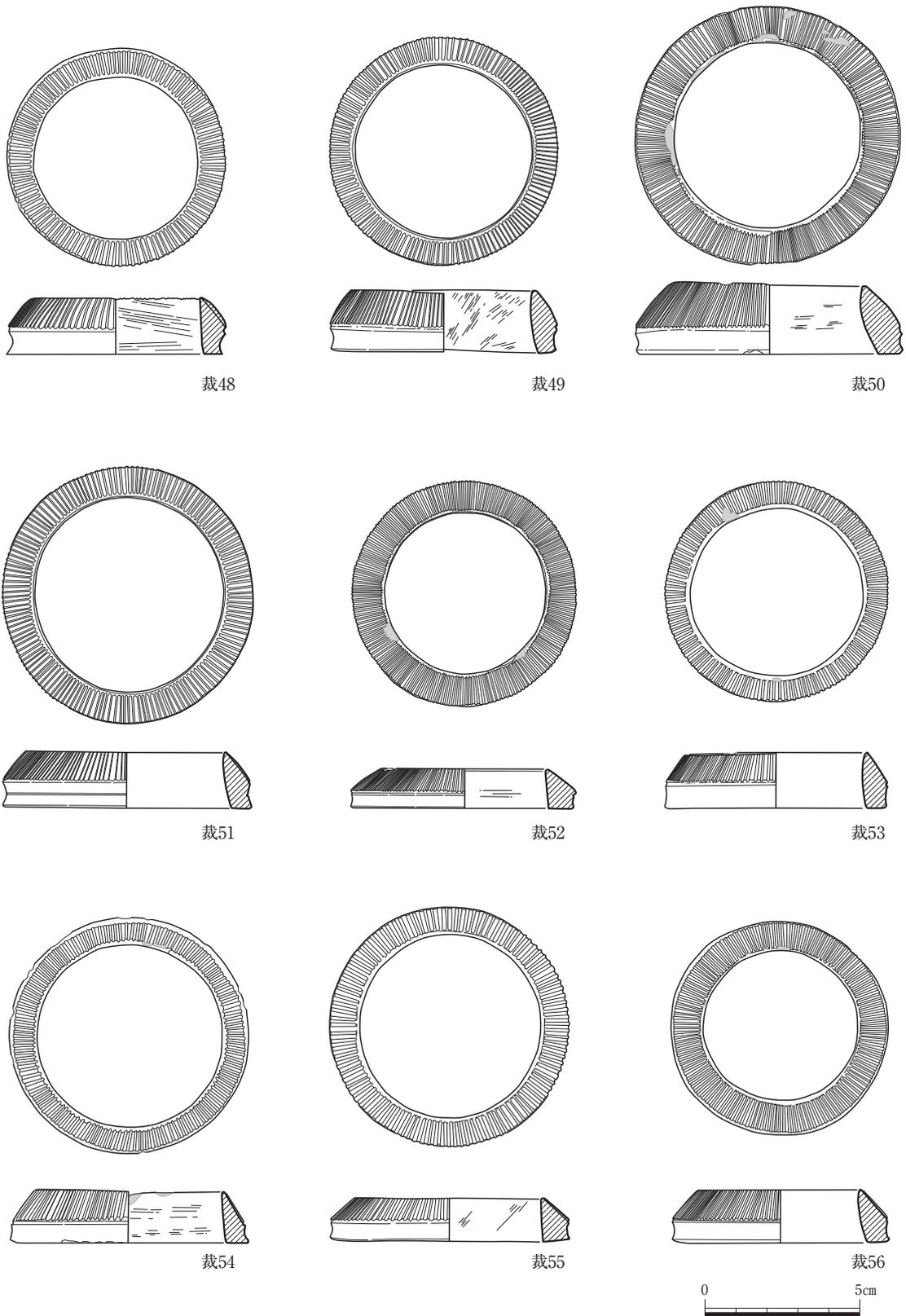


図21 裁48 - 56 石釧 (1 : 2)

2 石製品

凸部と、幅約1mmで断面U字形の凹部とが反復する、a2種刻みである。凸部の幅は一定しておらず、図の右側より左側が幅広の傾向がある。外側面に1条の匙面帯が横方向に巡る。これらの形態的特徴から、II-a型式に該当する。外斜面と外側面との境に、成形時の割り付けに起因すると推定される浅い沈線が巡る。内面は内傾し、中位で膨らむ。不定方向の擦痕を残す。底面は水平な平坦面である。なお、全面に赤色顔料が付着する。

裁50

淡緑色を呈する。石材は、緻密だが軽い印象をうける緑色凝灰岩である（材質Ⅲ）。風化がやや進行している。外斜面に櫛歯状装飾が放射状に巡る。櫛歯状装飾は、断面台形の凸部と、幅約1mmで断面U字形の凹部とが反復する、a2種刻みである。外側面に1条の匙面帯が横方向に巡る。これらの形態的特徴から、II-a型式に該当する。外斜面と外側面との境に、成形時の割り付けに起因すると推定される浅い沈線が巡る。内面は内傾し、中位で膨らむ。底面は水平な平坦面である。なお、赤色顔料の付着は顕著ではない。

裁51

淡緑灰色を呈する。石材は、緑色凝灰岩である（材質Ⅲ）。風化は顕著ではない。外斜面に櫛歯状装飾が放射状に巡る。櫛歯状装飾は、幅約0.5mで断面蒲鋒形の凸部と、幅約1mmで断面U字形の凹部とが反復する、a1種刻みである。外側面に1条の匙面帯が横方向に巡る。これらの形態的特徴から、II-a型式に該当する。また、匙面体の中央には浅い沈線が巡る。外斜面と外側面との境に、成形時の割り付けに起因すると推定される浅い沈線が巡る。内面は内傾し、中位で膨らむ。土が付着するため、加工痕が観察できない。底面は水平な平坦面である。なお、内面と底面に鮮やかな赤色顔料が付着する。

裁52

淡緑灰色を呈する。石材は、軽い印象を受ける緑色凝灰岩である（材質Ⅲ）。風化がやや進行している。外斜面に櫛歯状装飾が放射状に巡る。櫛歯状装飾は、断面台形の凸部と、幅約1mmで断面U字形の凹部とが反復する、a2種刻みである。ただし、凸部は細く、頂上の平坦面が顕著ではない。その意味ではa1種刻みに近いが、全体として外斜面に凹部を刻み込んだとの印象が強い点を勘案し、a2種とする。外側面に1条の匙面帯が横方向に巡る。これらの形態的特徴から、II-a型式に該当する。外斜面と外側面との境に、成形時の割り付けに起因すると推定される浅い沈線が巡る。内面は直線的に内傾する。わずかながら横方向の擦痕を残す。底面は平坦な水平面である。なお、底面に鮮やかな赤色顔料が付着する。

裁53

緑灰色を呈する。石材は、木目状の特徴的な葉理がある緑色凝灰岩である（材質Ⅳ）。外斜面に櫛歯状装飾が放射状に巡る。櫛歯状装飾は、幅約1mmで断面蒲鋒形の凸部と、幅約1mmで断面U字形の凹部とが反復する、a1種刻みである。外側面に1条の匙面帯が横方向に巡る。これらの形態的特徴から、II-a型式に該当する。外斜面と外側面との境に、成形時の割り付けに起因すると推定される浅い沈線が巡る。内面はやや膨らみをもって直立する。底面は平坦な水平面である。なお、全面に赤色顔料が付着する。

裁54

淡緑灰色を呈する。石材は、多孔質で軽い印象を受ける緑色凝灰岩である（材質Ⅲ）。風化は顕著ではない。外斜面に櫛歯状装飾が放射状に巡る。櫛歯状装飾は、断面台形の凸部と、幅約1mmで断面U字形の凹部とが反復する、a 2種刻みである。ただし、凸部は細く、頂上の平坦面が顕著ではない。その意味ではa 1種刻みに近いが、全体として外斜面に凹部を刻み込んだとの印象が強い点を勘案し、a 2種とする。外側面に1条の匙面帯が横方向に巡る。これらの形態的特徴から、Ⅱ-a型式に該当する。外斜面と外側面との境に、成形時の割り付けに起因すると推定される浅い沈線が巡る。内面は直線的にやや内傾する。回転運動に起因すると推定される条痕がかすかに残るが、その後研磨されたらしく、不明瞭である。底面は平坦な水平面である。なお、赤色顔料の付着は顕著ではない。

裁55

淡緑灰色を呈する。石材は、緑色凝灰岩である（材質Ⅲ）。風化は顕著ではない。外斜面に櫛歯状装飾が放射状に巡る。櫛歯状装飾は、断面台形の凸部と、幅約1mmで断面U字形の凹部とが反復する、a 2種刻みである。外側面に1条の匙面帯が横方向に巡る。これらの形態的特徴から、Ⅱ-a型式に該当する。外斜面と外側面との境には、成形時の割り付けに起因すると推定される浅い沈線が巡る。内面は直線的にやや内傾する。不定方向の擦痕を残す。底面は外へ向けてややせり上がる。なお、赤色顔料の付着は顕著ではない。

裁56

暗緑色を呈する。石材は、硬い質感をもつ緑色凝灰岩である。材質Ⅲの可能性が高いと考えるが、手に持った印象は重く、材質Ⅱとすべき余地が残る。外斜面に櫛歯状装飾が放射状に巡る。櫛歯状装飾は、幅約0.5mmで断面蒲鉾形の凸部と、幅約1mmで断面U字形の凹部とが反復する、a 1種刻みである。外側面に1条の匙面帯が横方向に巡る。これらの形態的特徴から、Ⅱ-a型式に該当する。内面はやや膨らみをもって内傾する。底面は平坦な水平面である。また、底面に不定方向の擦痕が残る。なお、全面に鮮やかな赤色顔料が付着する。

裁57

暗緑灰色を呈する。石材は緑色凝灰岩である（材質Ⅲ）。風化は顕著ではない。外斜面に櫛歯状装飾が放射状に巡る。櫛歯状装飾は、幅約1mmで断面U字形の凹部と、それを区切る細い稜とが反復する、a 3種刻みである。ただし、凹部を区切る稜を、細いながら凸部であると捉えれば、a 1種刻みとみなす余地もある。外側面に1条の匙面帯が横方向に巡る。これらの形態的特徴から、Ⅱ-a型式に該当する。外斜面と外側面との境に、成形時の割り付けに起因すると推定される浅い沈線が巡る。内面は内傾し、中位で膨らむ。底面は外へ向けてせり上がる。なお、全面に鮮やかな赤色顔料が付着する。

裁58

暗緑色を呈する。軽い印象を受ける緑色凝灰岩である（材質Ⅲ）。風化は顕著ではない。外斜面に櫛歯状装飾が放射状に巡る。櫛歯状装飾は、幅約0.5mmで断面蒲鉾形の凸部と、幅約1mmで断面U字形の凹部とが反復する、a 1種刻みである。外側面に1条の匙面帯が横方向に巡る。これらの形態的特徴から、Ⅱ-a型式に該当する。外斜面と外側面との境に、成形時の割り付けに起因すると推定される沈線が巡る。内面は内傾し、中位で膨らむ。土および赤色顔料が付着し、加工痕が観察できない。底面は水

2 石製品

平な平坦面である。なお、全面に鮮やかな赤色顔料が付着する。

裁59

暗緑灰色を呈する。石材は、木目状の特徴的な葉理がある緑色凝灰岩である（材質Ⅳ）。外斜面に櫛歯状装飾が放射状に巡る。櫛歯状装飾は、幅0.5mm未満で断面蒲鉾形の凸部と、幅約1mmで断面U字形の凹部とが反復する、a1種刻みである。ただし、凸部はa1種としては細いので、これを凹部を区切る稜であると捉えれば、a3種刻みとみなす余地もある。外側面に1条の匙面帯が横方向に巡る。これらの形態的特徴から、Ⅱ-a型式に該当する。内面は内傾し、上部で膨らむ。底面は平坦な水平面である。なお、内面と底面に鮮やかな赤色顔料が付着する。

裁60

暗緑灰色を呈する。石材は、不明瞭ながら木目状の特徴的な葉理がある緑色凝灰岩である（材質Ⅳ）。外斜面に櫛歯状装飾が放射状に巡る。櫛歯状装飾は、断面台形の凸部と、幅約1mmで断面U字形の凹部とが反復する、a2種刻みである。ただし、凸部頂上の平坦面は顕著ではなく、その意味ではa1種刻みに近いものである。外側面に1条の匙面帯が横方向に巡る。これらの形態的特徴から、Ⅱ-a型式に該当する。また、匙面帯には横方向の擦痕が残る。外斜面と外側面との境に、成形時の割り付けに起因すると推定される浅い沈線が巡る。内面は内傾し、中位で膨らむ。全面的に縦方向の擦痕が残る、それに切られる形で、回転条痕がわずかに観察される。底面は平坦ではなく、やや波打っている。なお、全面に鮮やかな赤色顔料が付着する。

裁61

淡緑灰色を呈する。石材は、軽い印象を受ける緑色凝灰岩である（材質Ⅲ）。風化は顕著ではない。外斜面に櫛歯状装飾が放射状に巡る。櫛歯状装飾は、断面台形の凸部と、幅約1mmで断面U字形の凹部とが反復する、a2種刻みである。外側面に2条の匙面帯が横方向に巡る。これらの形態的特徴から、Ⅲ-a型式に該当する。内面は直立する。回転運動に起因すると推定される条痕が残る。底面は水平な平坦面である。なお、赤色顔料の付着は顕著ではない。

裁62

緑灰色を呈する。石材は、木目状の特徴的な葉理がある緑色凝灰岩である（材質Ⅳ）。外斜面に幅約5mmの匙面帯が放射状に巡る（c種刻み）。外側面に2条の匙面帯が横方向に巡る。これらの形態的特徴から、Ⅲ-c型式に該当する。内面は内傾し、中位で膨らむ。土が付着するため、加工痕が観察できない。底面は水平な平坦面である。なお、全面に鮮やかな赤色顔料が付着する。

裁63

緑灰色を呈する。石材は、木目状の特徴的な葉理がある緑色凝灰岩である（材質Ⅳ）。外斜面に櫛歯状装飾が放射状に巡る。櫛歯状装飾は、幅0.5mm未満で断面蒲鉾形の凸部と、幅約1mmで断面U字形の凹部とが反復する、a1種刻みである。ただし、凸部はa1種としては細いので、これを凹部を区切る稜であると捉えれば、a3種刻みとみなす余地もある。外側面に2条の匙面帯が横方向に巡る。これらの形態的特徴から、Ⅲ-a型式に該当する。内面は内傾し、中位で膨らむ。内面の下位に、回転運動に起因すると推定される条痕が残る。底面は水平な平坦面である。なお、全面に鮮やかな赤色顔料が付着する。

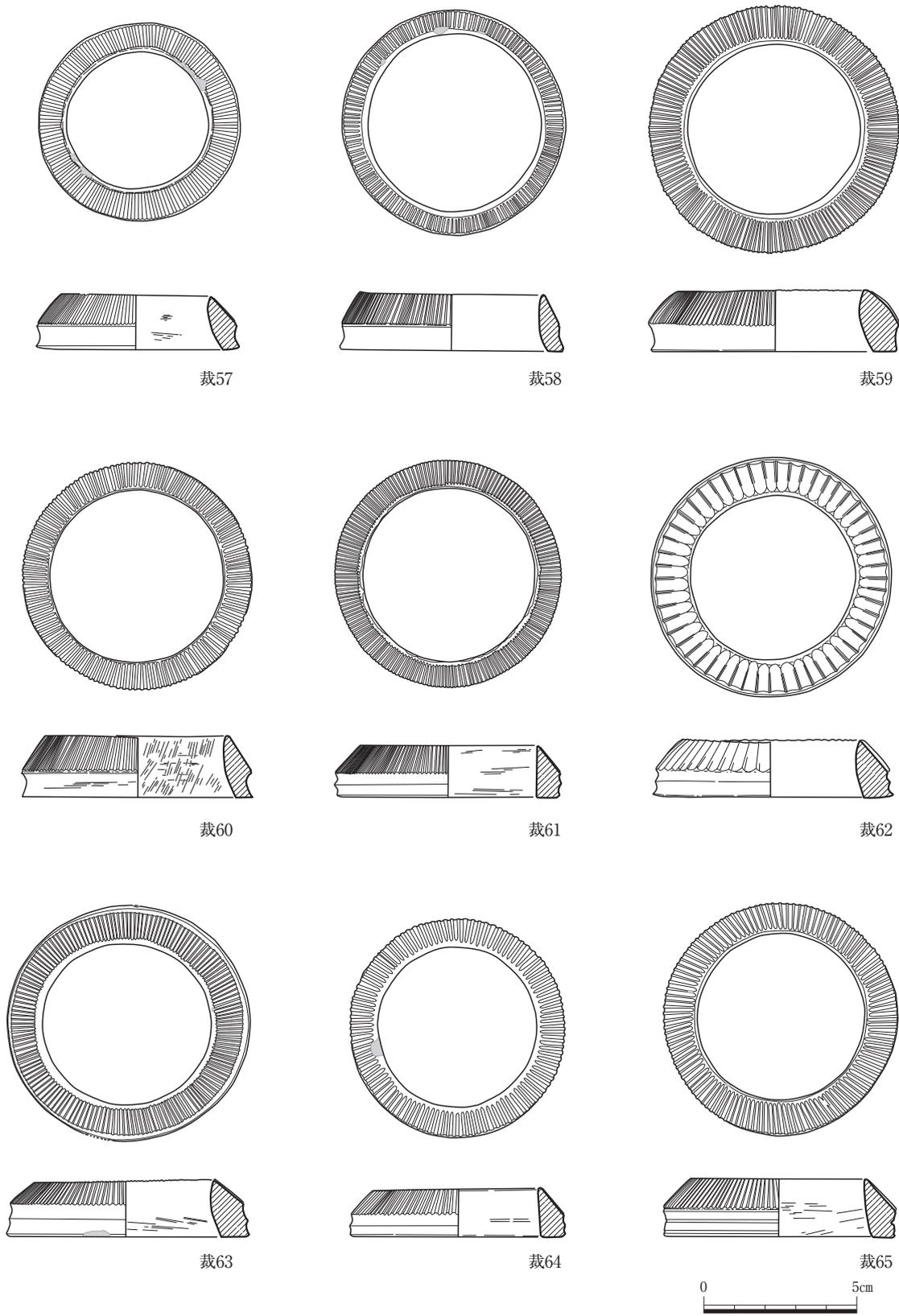


図22 裁57 - 65 石釧 (1 : 2)

2 石製品

裁64

淡緑灰色を呈する。石材は、軽い印象を受ける緑色凝灰岩である（材質Ⅲ）。風化がやや進行している。外斜面に櫛歯状装飾が放射状に巡る。櫛歯状装飾は、断面台形の凸部と、幅約1mmで断面U字形の凹部とが反復する、a2種刻みである。ただし、風化の進行に伴って凸部の頂部が割れた結果、a2種と見えている可能性が否定できない。外側面に2条の匙面帯が横方向に巡る。これらの形態的特徴から、Ⅲ-a型式に該当する。内面は直線的に内傾する。底面は水平な平坦面である。なお、全面に赤色顔料が付着する。

裁65

緑灰色を呈する。石材は、硬い質感をもつ緑色凝灰岩である。材質Ⅲの可能性が高いと考えるが、ただし、裏面には葉理が顕著に観察される点は材質Ⅳに近く、また手に持った印象が重いことから、材質Ⅱと考える余地がある。外斜面に櫛歯状装飾が放射状に巡る。櫛歯状装飾は、幅約1mmで断面U字形の凹部と、それを区切る細い稜とが反復する、a3種刻みである。ただし、凹部を区切る稜を、細いながら凸部であると捉えれば、a1種刻みとみなす余地もある。外側面に1条の匙面帯が横方向に巡る。これらの形態的特徴から、Ⅱ-a型式に該当する。また、匙面帯の中央および下端には浅い沈線がめぐる。外斜面と外側面との境に、成形時の割り付けに起因すると推定される浅い沈線が巡る。内面はやや膨らみをもって内傾する。不定方向の擦痕を残す。底面は水平な平坦面である。なお、全面に鮮やかな赤色顔料が付着する。

裁66

暗緑灰色を呈する。石材は、木目状の特徴的な葉理がある緑色凝灰岩である（材質Ⅳ）。外斜面に櫛歯状装飾が放射状に巡る。櫛歯状装飾は、断面台形の凸部と、幅約1mmで断面U字形の凹部とが反復する、a2種刻みである。外側面に2条の匙面帯が横方向に巡る。これらの形態的特徴から、Ⅲ-a型式に該当する。内面はやや膨らみをもって内傾する。不定方向の擦痕を残す。底面は水平な平坦面である。なお、内面と底面に赤色顔料が付着する。

裁67

淡緑灰色を呈する。石材は、軽い印象を受ける緑色凝灰岩である（材質Ⅲ）。風化がやや進行している。外斜面に櫛歯状装飾が放射状に巡る。放射状装飾は、断面台形の凸部と、幅約1mmで断面U字形の凹部とが反復する、a2種刻みである。外側面に2条の匙面帯が横方向に巡る。これらの形態的特徴から、Ⅲ-a型式に該当する。なお、匙面帯は上段が下段よりも約2mm幅が狭い。内面はやや膨らみをもって内傾する。横方向の擦痕に重なる形で、縦方向の擦痕が残る。底面は平坦な水平面である。なお、赤色顔料の付着は顕著ではない。

裁68

淡緑灰色を呈する。石材は、緑色凝灰岩である（材質Ⅲ）。外斜面に櫛歯状装飾が放射状に巡る。放射状装飾は、断面台形の凸部と、幅約1mmで断面U字形の凹部とが反復する、a2種刻みである。外側面に2条の匙面帯が横方向に巡る。これらの形態的特徴から、Ⅲ-a型式に該当する。外斜面と外側面との境に、成形時の割り付けに起因すると推定される浅い沈線が巡る。内面はやや内傾し、中位で膨らむ。不定方向の細かい擦痕が残る。底面は平坦な水平面から、端部でせり上がる。なお、全面に鮮やか

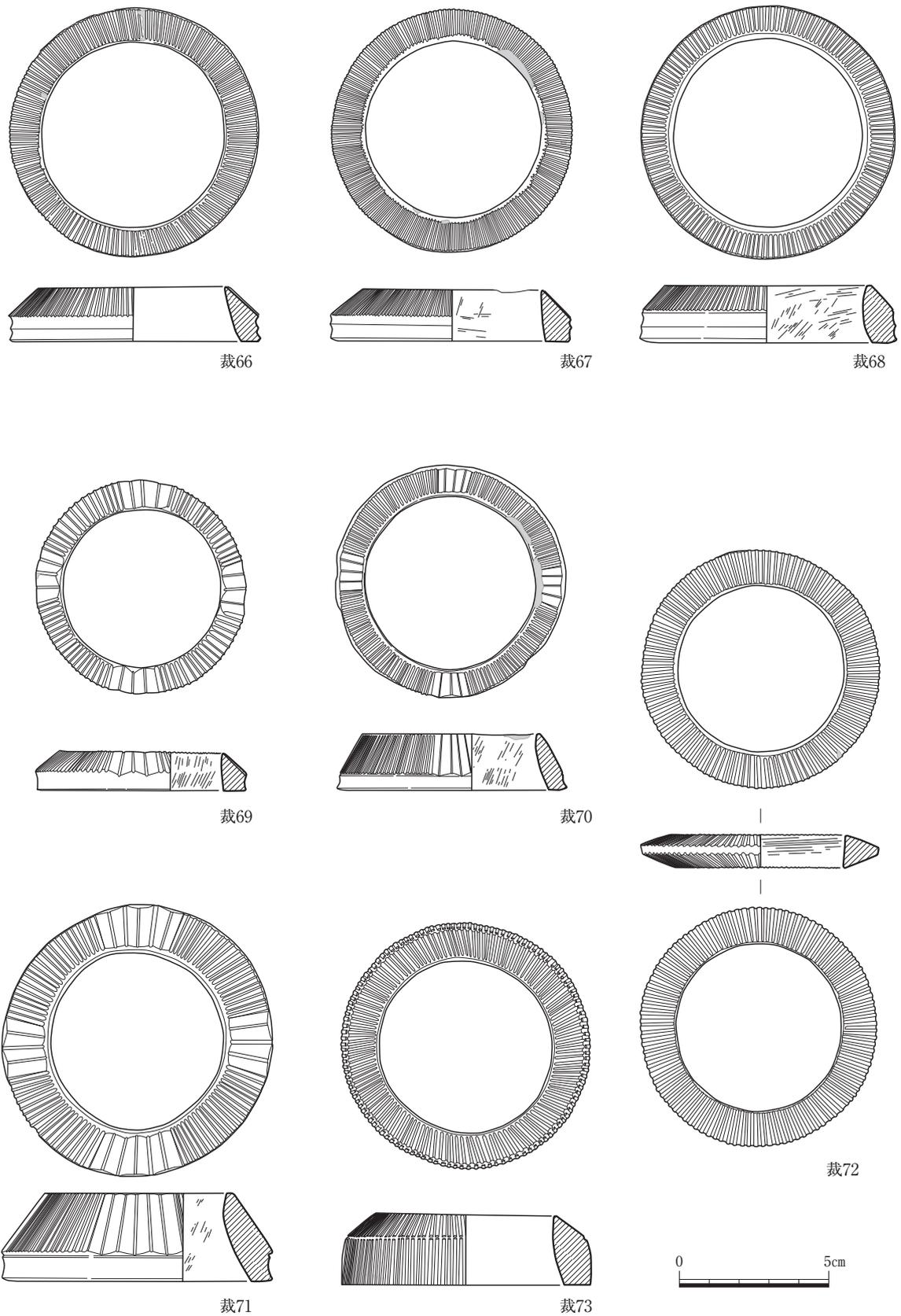


図23 裁66-73 石釧 (1:2)

2 石製品

表3 石釧計測表

番号	器種	外径(cm)	内径(cm)	環体幅(cm)	高さ(cm)	斜面長(cm)	重さ(g)	材質	外斜面	側面	型式
裁46	石釧	9.3	6.2	1.6	1.1	1.7	75	滑石	-	-	
裁48	石釧	7.1	5.3	0.9	1.8	1.2	45	Ⅱ	a 1種	匙面	Ⅱ-a
裁49	石釧	7.4	5.7	0.8	2.0	0.8	50	Ⅳ	a 2種	匙面	Ⅱ-a
裁50	石釧	8.7	6.1	1.3	2.2	1.8	55	Ⅲ	a 2種	匙面	Ⅱ-a
裁51	石釧	8.1	6.1	1.1	1.8	1.2	55	Ⅲ	a 1種	匙面+沈線	Ⅱ-a
裁52	石釧	7.3	5.2	1.0	1.3	1.2	20	Ⅲ	a 2種	匙面	Ⅱ-a
裁53	石釧	7.2	5.5	0.8	1.8	1.2	40	Ⅳ	a 1種	匙面	Ⅱ-a
裁54	石釧	7.8	6.0	0.9	1.7	1.2	20	Ⅲ	a 2種	匙面	Ⅱ-a
裁55	石釧	7.8	5.9	0.9	1.4	1.1	35	Ⅲ	a 2種	匙面	Ⅱ-a
裁56	石釧	7.1	5.0	1.0	1.7	1.3	45	Ⅲ	a 1種	匙面	Ⅱ-a
裁57	石釧	6.7	4.7	1.1	1.8	1.2	35	Ⅲ	a 3種	匙面	Ⅱ-a
裁58	石釧	7.3	5.7	0.8	1.9	1.1	35	Ⅲ	a 1種	匙面	Ⅱ-a
裁59	石釧	8.2	5.6	1.3	2.1	1.5	75	Ⅳ	a 1種	匙面	Ⅱ-a
裁60	石釧	7.6	5.8	0.9	2.0	1.4	50	Ⅳ	a 2種	匙面	Ⅱ-a
裁61	石釧	7.5	5.6	0.9	1.7	1.1	25	Ⅲ	a 2種	匙面	Ⅲ-a
裁62	石釧	8.0	5.5	1.2	1.9	1.4	60	Ⅳ	c種	匙面×2	Ⅲ-c
裁63	石釧	8.0	5.6	1.3	1.9	1.2	65	Ⅳ	a 1種	匙面	Ⅲ-a
裁64	石釧	7.1	5.3	0.9	1.6	1.1	25	Ⅲ	a 2種	匙面	Ⅲ-a
裁65	石釧	7.7	5.5	1.1	1.9	1.4	60	Ⅲ	a 3種	匙面+沈線	Ⅱ-a
裁66	石釧	8.1	6.1	1.1	1.8	1.4	45	Ⅳ	a 2種	匙面	Ⅲ-a
裁67	石釧	8.1	5.9	1.1	1.8	1.3	45	Ⅲ	a 2種	匙面	Ⅲ-a
裁68	石釧	8.5	6.3	1.1	1.9	1.1	45	Ⅲ	a 2種	匙面	Ⅲ-a
裁69	石釧	7.1	5.3	0.8	1.2	1.0	25	Ⅱ	a 1種	匙面	Ⅱ-a'
裁70	石釧	7.8	5.8	1.0	1.9	1.5	25	Ⅲ	a 2種	匙面	Ⅱ-a'
裁71	石釧	9.1	5.8	1.7	2.9	2.4	95	Ⅲ	a 2種	匙面	Ⅱ-a'
裁72	石釧	8.0	5.6	1.2	1.1	1.1	35	Ⅱ	a 2種	なし	V-a
裁73	石釧	8.4	5.8	1.3	2.3	1.1	90	Ⅳ	a 1種	櫛歯	I-a

な赤色顔料が付着する。

裁69

暗緑灰色を呈する。石材は、緑色凝灰岩と考えられ、材質Ⅱとした。外斜面に折面帯と櫛歯状の組合からなる装飾が放射状に巡る。折面帯は、外斜面を4等分する位置に4面1組となってあしらわれ、折面の凹部および凸部に沈線がある。それらの間を埋める櫛歯状装飾は、幅約1mmで断面蒲鉾形の凸部と、幅約1mmで断面U字形の凹部とが反復する、a 1種刻みである。外側面に1条の匙面帯が横方向に巡る。これらの形態的特徴から、Ⅱ-a'型式に該当する。内面はやや膨らみをもって直立する。縦方向の擦痕を残す。底面は平坦な水平面である。なお、全面に鮮やかな赤色顔料が付着する。

裁70

淡緑灰色を呈する。石材は、軽い印象を受ける緑色凝灰岩である(材質Ⅲ)。風化がやや進行している。外斜面に折面帯と櫛歯状の組合からなる装飾が放射状に巡る。折面帯は、外斜面を4等分する位置に4面1組となってあしらわれ、折面の凹部および凸部に沈線がある。それらの間を埋める櫛歯状装飾は、断面台形の凸部と、幅約1mmで断面U字形の凹部とが反復する、a 2種刻みである。外側面に1条の匙面帯が横方向に巡る。これらの形態的特徴から、Ⅱ-a'型式に該当する。外斜面と外側面との境に、成形時の割り付けに起因すると推定される浅い沈線が巡る。内面は内傾し、上部で膨らむ。斜上する擦痕を残す。底面は外へ向けてせり上がる。なお、外面に赤色顔料が付着する。

裁71

暗緑灰色を呈する。石材は、緑色凝灰岩である。材質Ⅲとしたが、他の材質Ⅲにくらべると、重い印象を受ける。外斜面に匙面と櫛歯状の組合せからなる装飾が放射状に巡る。匙面は、外斜面を4等分する位置に2面または3面が1組となってあしらわれ、匙面の中央および両肩に沈線がある。それらの間を埋める櫛歯状装飾は、断面台形の凸部と、幅約1mmで断面U字形の凹部とが反復する、a2種刻みである。外側面に1条の匙面帯が横方向に巡る。これらの形態的特徴から、Ⅱ-a'型式に該当する。外斜面と外側面との境に、成形時の割り付けに起因すると推定される浅い沈線が巡る。内面は内傾し、上部で膨らむ。斜上する擦痕が残る。底面は平坦な水平面である。なお、全面に赤色顔料が付着する。

裁72

暗緑灰色を呈する。石材は、緑色凝灰岩と考えられ、材質Ⅱとした。表裏両面に外斜面をもち、櫛歯状装飾が放射状に巡る。櫛歯状装飾は、断面台形の凸部と、幅約1mmで断面U字形の凹部とが反復する、a2種刻みである。ただし、凸部上端の平坦面が広いことから、a4種と考えるべき余地が残る。外側面は平坦である。また、環体幅が環体高より1mm大きい。これらの形態的特徴から、Ⅴ-a型式に該当する。内面は直立し、上下両端に面取りを施す。回転運動に起因すると推定される深い条痕が残る。なお、赤色顔料の付着は顕著ではない。

裁73

暗緑灰色を呈する。石材は、やや不明瞭だが木目状の特徴的な葉理がある緑色凝灰岩である(材質Ⅳ)。外斜面および外側面に櫛歯状装飾が放射状に巡る。櫛歯状装飾は幅約1mmで断面蒲鉾形の凸部と、幅約1mmで断面U字形の凹部とが反復する、a1種刻みである。ただし、特に外斜面において、ところどころa2種刻みに近い部分がある。これらの形態的特徴から、Ⅰ-a型式に該当する。外斜面と外側面との境に、成形時の割り付けに起因すると推定される浅い沈線が巡る。内面は内傾し、中位で膨らむ。土が付着し、加工痕が観察できない。底面は平坦な水平面である。なお、内面と底面に鮮やかな赤色顔料が付着する。(北山)

4 紡錘車形石製品**裁17**

直径5.5cm、高さ1.0cm、重量35gである。黄灰色を呈する。石材は、硬質で、光沢があり、碧玉と考えられる(材質Ⅰ)。上面は3段構成で、各段は明瞭に削り出される。内孔は、ほぼ中心に位置する。孔径は、上面で5mm、下面で4mmである。上面から穿孔されており、下面には穿孔時の剝離痕がある。下面はほぼ平坦である。下段側面や孔内に赤色顔料が残る。

裁18

直径5.3cm、高さ1.25cm、重量40gである。現状で褐色を呈するが、裏面の一部が緑灰色であるため、変色した結果と考えられる。石材は、硬質で、光沢があり、碧玉と考えられる(材質Ⅰ)。上面は3段構成で、各段は匙面を呈する。2・3段目と内孔の中心が、1段目の中心より2.5mmほどずれている。孔径は、上面で6mm、下面で4.4mmである。上面から穿孔されており、下面には穿孔時の剝離痕がある。下面は、高さ1mm程度のゆるやかな凸面をなす。上段や孔内に赤色顔料が残る。

2 石製品

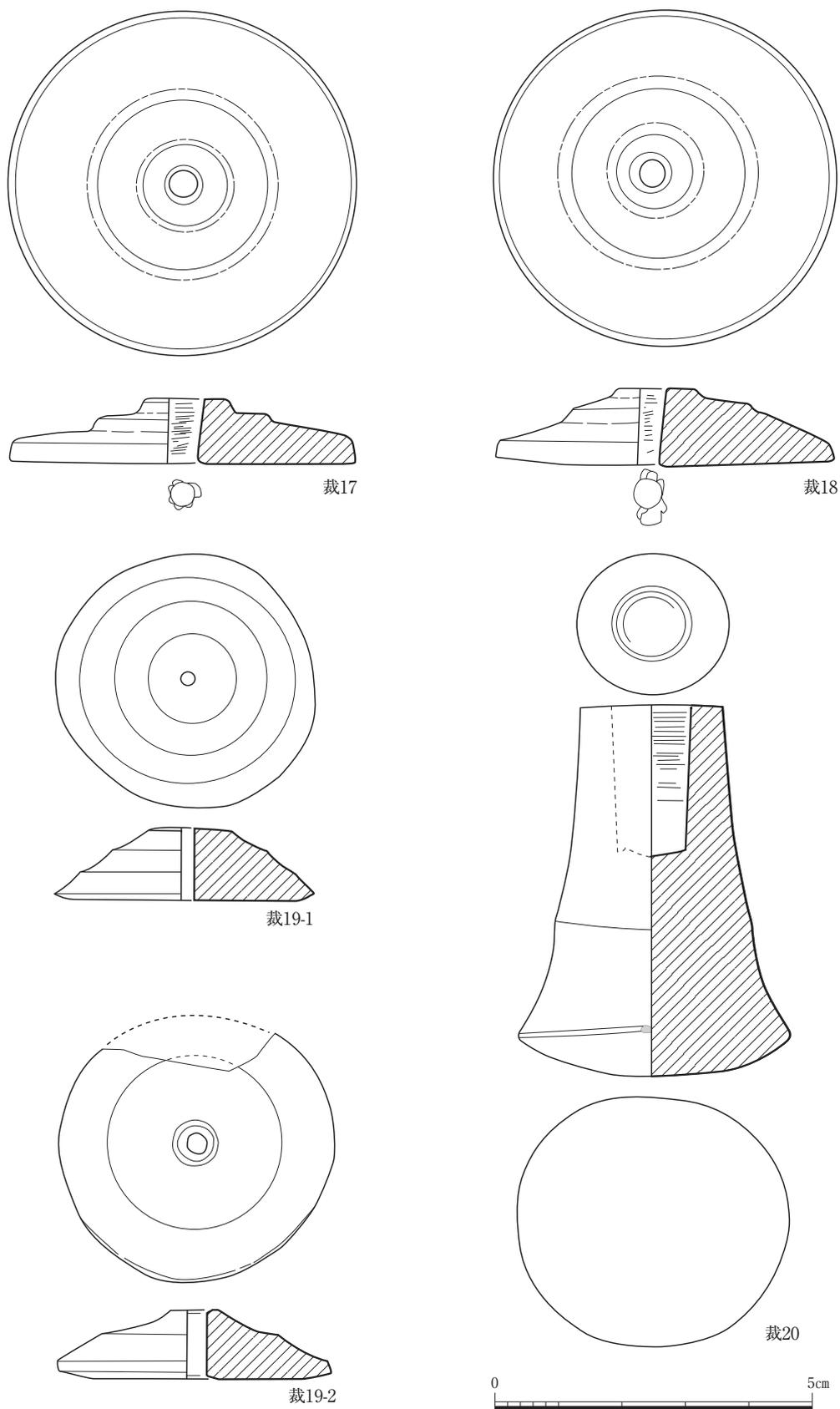


图24 裁17-20 紡錘車形石製品・筒形石製品 (1:1)

裁19 (その1)

直径4.1cm、高さ1.15cm、重量15gである。淡緑色を呈する。石材は、軟質の緑色凝灰岩である(材質Ⅲ)。風化が進行している。上面は3段構成で、各段は匙面を呈する。内孔は、ほぼ中心に位置する。孔径は、上面・下面ともに約2mmだが、上面のほうがやや小さい印象を受ける。両面から穿孔されたものと考えられる。下面は平坦で、端部を約2mm幅で面取りする。

裁19 (その2)

直径4.3cm、高さ1.1cm、重量15gである。1段目の一部を欠損する。淡緑色を呈する。石材は、軟質の緑色凝灰岩である(材質Ⅲ)。風化が進行している。上面は2段構成で、2段とも匙面を呈する。内孔は、ほぼ中心に位置する。孔径は、上面・下面ともに3mmである。上面から穿孔されたようだが、下段からの穿孔の有無は不明瞭である。下面はほぼ平坦で、端部を約5mm幅で面取りする。(大野壽子)

5 筒形石製品**裁20**

高さ5.9cm、最大径4.25cm、重量95gである。緑灰色を呈する。石材は、硬質の緑色凝灰岩で、材質Ⅱとした。高さ2.4cmの位置に直径3.2cmの稜がめぐり、それより下は匙面を呈する。下面は、高さ7mmの凸面をなす。上端は直径2.2cmで、ほぼ中央に直径1.3cm、深さ2.48cmの孔を穿つ。孔の側壁には穿孔時の擦痕が残り、底面には穿孔に用いたと考えられる管状工具の回転痕跡が、溝状に残る。外面の一部と、孔内に赤色顔料が残る。(大野)

3 玉 類

玉類は、管玉・棗玉・ガラス管玉・ガラス小玉が保管されている。裁5・6・7・8・9・10・11・12・13・14・15が相当する。第Ⅱ章で述べられたように、玉類には出土古墳の混在が認められるが、台帳番号は出土した古墳ごとの纏まりをある程度は残していると考えられるので、番号ごとに概要を報告する。各個体の計測値については観察表に記載した。

なお、蛍光X線分析、AR法、CR法などの自然科学分析は行っていないので、材質・技法に関する記述はあくまで肉眼観察によるものである。

1 管 玉**裁5**

管玉10点である。長さ27.02～37.24mm、径6.78～7.96mm、内孔径2.53～4.89mm。全て碧玉製であり、両面穿孔である。色調は濃灰緑色を呈す。

裁6

管玉24点である。部分的に朱が付着している個体が多い。24点のうち23点は、碧玉製であり、長さ13.45～30.94mm、径6.36～8.41mm、内孔径1.79～3.60mmである。22点が両面穿孔、1点だけが片面穿孔である。色調は1点が灰緑色の他は、濃灰緑色を呈する。他の1点は軟質の緑色凝灰岩製であり、長さ

3 玉 類

21.17mm、外径6.73mm、内孔径2.25mmである。孔は両面から穿たれており、淡灰緑色を呈する。

裁 8

管玉 20 点である。全て碧玉製であり、3 点が濃緑色、残り 17 点は淡緑色である。19 点が両面穿孔、1 点が片面穿孔である。長さ 6.69 ~ 38.88mm、外径 3.03 ~ 4.62mm、内孔径 1.54 ~ 2.67mm を測る。長さはばらつきがあるが、径が細身のものが揃っている。

裁 9

管玉 20 点である。20 点全てが碧玉製であり、両面穿孔である。長さ 13.11 ~ 23.12mm、外径 4.73 ~ 7.19mm、内孔径 2.14 ~ 3.34mm を測る。

裁 10

管玉 9 点である。9 点全てが碧玉製であり、両面穿孔である。3 点は小型で、長さ 11.40 ~ 12.67mm、外径 5.14 ~ 5.98mm、内孔径 2.61 ~ 3.50mm を測り、濃緑色を呈する。残り 6 点は、長さ 22.39 ~ 28.23mm、外径 6.51 ~ 8.13mm、内孔径 1.91 ~ 2.50mm を測り、緑色を呈する。

2 棗 玉

裁 11

棗玉 89 点である。すべて滑石であり、色は淡灰・暗灰・薄茶・灰褐・白が存在している。最大径 4.54 ~ 6.25mm、高さ 7.39 ~ 12.79mm で、すべて両面穿孔である。

裁 12

後述する裁 12 のガラス玉とともに保管されていた棗玉 1 点である。上端径 3.17mm、下端径 3.33mm、最大径 4.57mm、高さ 7.36mm である。白色の滑石製で、両面穿孔である。

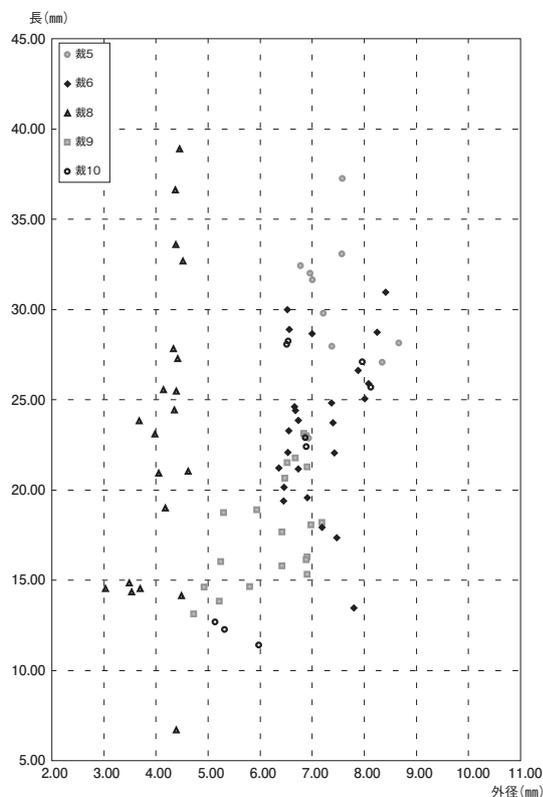


図 25 管玉法量分布図

3 ガラス玉

裁 7

ガラス管玉 1 点である。青水色を呈し、赤色顔料の付着が認められる。長さ 9.08mm、外径 6.00mm、内孔径は 2.89mm である。気泡の観察から、引き伸ばし切断技法であることがわかる。

裁 12

ガラス小玉 199 点、棗玉 1 点が保管されている。全体的に赤色顔料が多量に付着している。全て青水色で大 (44 個)・小 (155 個) の 2 種にわけられる。気泡が直線上に並ぶ、上下の切断面が平坦面をなしていることなど、引き伸ばし技法であると判断できる個体が多い一方で、

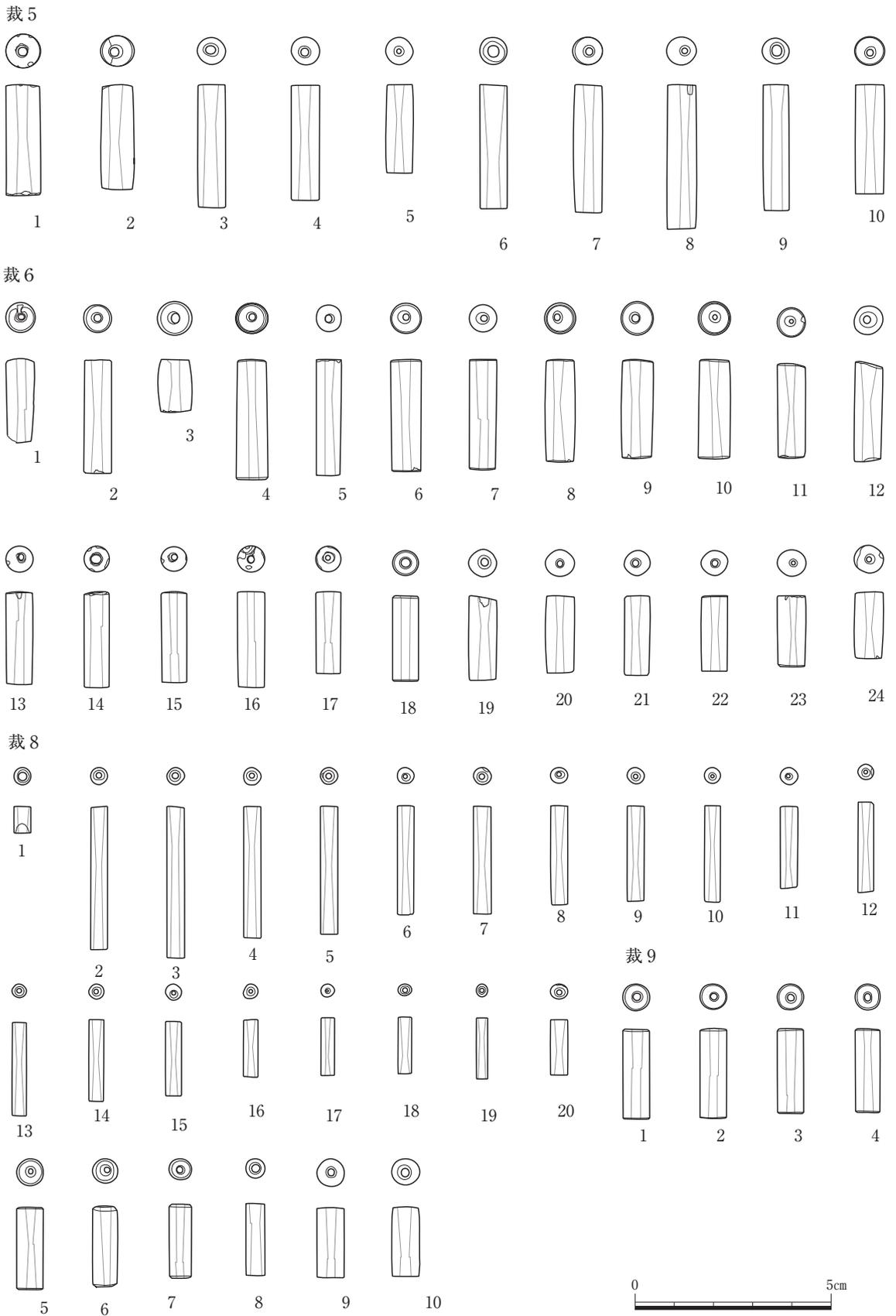
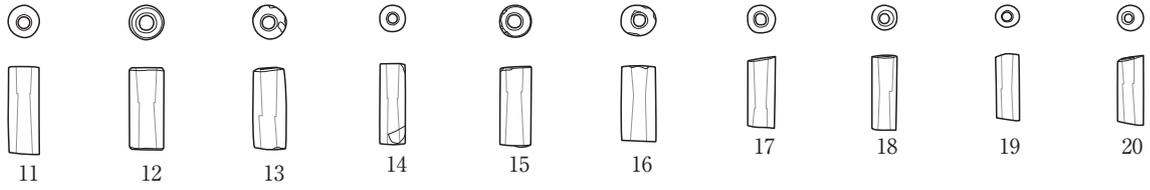


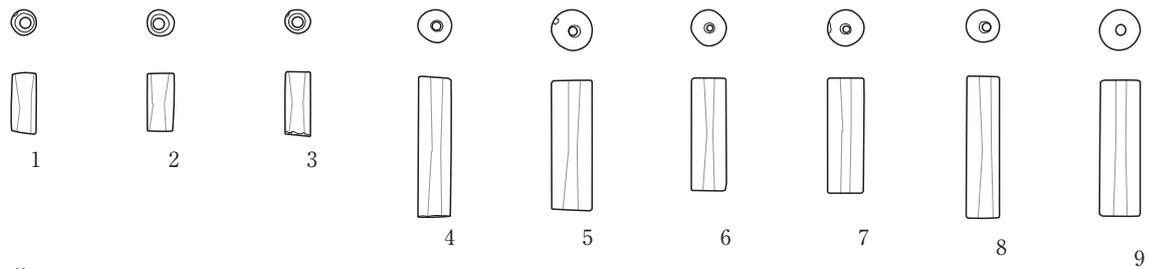
図26 裁5・6・8・9 管玉 (2:3)

3 玉 類

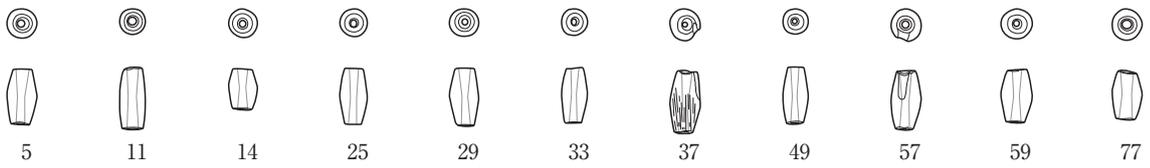
裁 9



裁 10



裁 11



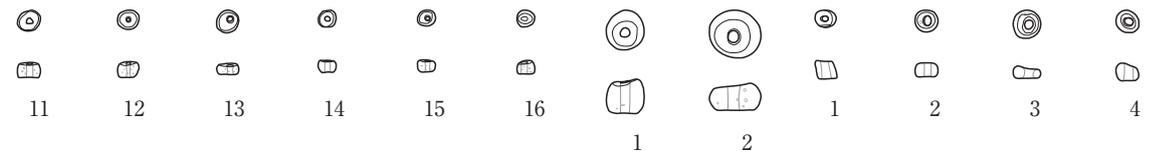
裁 7

裁 12



裁 13

裁 14



裁 15

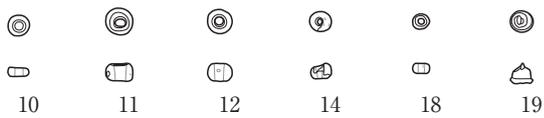
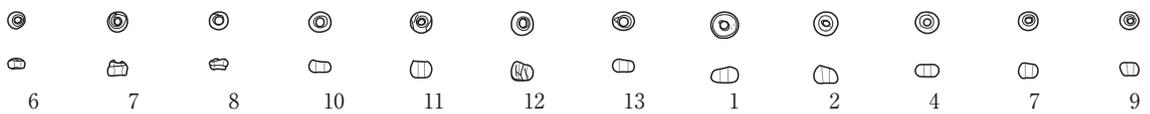


図27 裁9・10 管玉、裁11 棗玉、裁7・12・13・14・15 ガラス玉（2：3）

表4 裁5管玉計測表

番号	外径(mm)	長さ(mm)	内径(mm)	材質	色調	穿孔
裁5-01	8.67	28.13	2.81	碧玉	濃灰緑色	両面
裁5-02	8.35	27.07	3.38	碧玉	濃灰緑色	両面
裁5-03	7.01	31.64	3.58	碧玉	濃灰緑色	両面
裁5-04	7.22	29.77	3.10	碧玉	濃灰緑色	両面
裁5-05	6.93	22.87	2.53	碧玉	濃灰緑色	両面
裁5-06	6.96	32.00	4.89	碧玉	濃灰緑色	両面
裁5-07	7.57	33.08	3.06	碧玉	濃灰緑色	両面
裁5-08	7.58	37.24	3.20	碧玉	濃灰緑色	両面
裁5-09	6.78	32.42	3.64	碧玉	濃灰緑色	両面
裁5-10	7.38	27.96	2.87	碧玉	濃灰緑色	両面

表5 裁6管玉計測表

番号	外径(mm)	長さ(mm)	内径(mm)	材質	色調	穿孔
裁6-01	6.73	21.17	2.25	緑色凝灰岩	淡灰緑色	両面
裁6-02	6.56	28.89	2.32	碧玉	灰緑色	両面
裁6-03	7.80	13.45	3.04	碧玉	濃灰緑色	両面
裁6-04	8.41	30.94	2.54	碧玉	濃灰緑色	両面
裁6-05	6.52	29.99	2.55	碧玉	濃灰緑色	両面
裁6-06	8.25	28.74	3.24	碧玉	濃灰緑色	両面
裁6-07	7.00	28.65	2.45	碧玉	濃灰緑色	両面
裁6-08	7.88	26.61	2.62	碧玉	濃灰緑色	両面
裁6-09	8.01	25.06	2.37	碧玉	濃灰緑色	両面
裁6-10	8.08	25.88	2.46	碧玉	濃灰緑色	両面
裁6-11	7.40	23.72	2.63	碧玉	濃灰緑色	両面
裁6-12	7.37	24.82	3.33	碧玉	濃灰緑色	両面
裁6-13	6.73	23.84	2.84	碧玉	濃灰緑色	両面
裁6-14	6.66	24.62	3.20	碧玉	濃灰緑色	両面
裁6-15	6.55	23.28	2.27	碧玉	濃灰緑色	両面
裁6-16	6.68	24.41	1.79	碧玉	濃灰緑色	両面
裁6-17	6.36	21.22	2.26	碧玉	濃灰緑色	両面
裁6-18	6.53	22.08	2.08	碧玉	濃灰緑色	片面
裁6-19	7.43	22.06	3.60	碧玉	濃灰緑色	両面
裁6-20	6.91	19.57	2.45	碧玉	濃灰緑色	両面
裁6-21	6.46	20.15	2.23	碧玉	濃灰緑色	両面
裁6-22	6.45	19.39	2.09	碧玉	濃灰緑色	両面
裁6-23	7.19	17.93	2.39	碧玉	濃灰緑色	両面
裁6-24	7.47	17.34	2.52	碧玉	濃灰緑色	両面

3 玉 類

表6 裁8管玉計測表

番号	外径(mm)	長さ(mm)	内径(mm)	材質	色調	穿孔
裁8-01	4.39	6.69	2.54	碧玉	濃緑色	片面
裁8-02	4.37	36.61	2.55	碧玉	淡緑色	両面
裁8-03	4.45	38.88	2.42	碧玉	淡緑色	両面
裁8-04	4.38	33.58	2.67	碧玉	淡灰緑色	両面
裁8-05	4.52	32.68	2.50	碧玉	淡灰緑色	両面
裁8-06	4.33	27.82	1.99	碧玉	淡灰緑色	両面
裁8-07	4.42	27.26	2.46	碧玉	淡灰緑色	両面
裁8-08	4.39	25.47	2.10	碧玉	淡灰緑色	両面
裁8-09	4.35	24.42	2.23	碧玉	淡灰緑色	両面
裁8-10	4.14	25.54	1.70	碧玉	淡緑色	両面
裁8-11	4.62	21.02	2.06	碧玉	淡灰緑色	両面
裁8-12	3.98	23.10	2.11	碧玉	淡緑色	両面
裁8-13	3.68	23.82	2.15	碧玉	濃緑色	両面
裁8-14	4.05	20.93	2.10	碧玉	淡緑色	両面
裁8-15	4.18	19.00	1.88	碧玉	淡緑色	両面
裁8-16	3.70	14.53	2.06	碧玉	淡緑色	両面
裁8-17	3.49	14.85	1.54	碧玉	淡緑色	両面
裁8-18	3.53	14.34	1.97	碧玉	濃緑色	両面
裁8-19	3.03	14.52	1.59	碧玉	淡緑色	両面
裁8-20	4.49	14.15	2.29	碧玉	淡緑色	両面

表7 裁9管玉計測表

番号	外径(mm)	長さ(mm)	内径(mm)	材質	色調	穿孔
裁9-01	6.98	18.06	2.94	碧玉	濃緑色	両面
裁9-02	5.25	16.01	2.14	碧玉	濃緑色	両面
裁9-03	6.42	15.78	3.23	碧玉	淡灰緑色	両面
裁9-04	6.84	23.12	2.38	碧玉	緑色	両面
裁9-05	6.89	22.99	2.09	碧玉	緑色	両面
裁9-06	6.68	21.76	2.79	碧玉	緑色	両面
裁9-07	6.52	21.50	2.50	碧玉	緑色	両面
裁9-08	6.91	21.26	2.55	碧玉	緑色	両面
裁9-09	7.19	18.18	2.33	碧玉	緑色	両面
裁9-10	5.94	18.89	2.15	碧玉	緑色	両面
裁9-11	6.42	17.66	3.33	碧玉	緑色	両面
裁9-12	5.30	18.73	2.94	碧玉	緑色	両面
裁9-13	6.91	16.28	2.81	碧玉	緑色	両面
裁9-14	6.89	16.12	3.34	碧玉	緑色	両面
裁9-15	5.22	13.83	2.97	碧玉	緑色	両面
裁9-16	4.93	14.61	2.37	碧玉	緑色	両面
裁9-17	4.73	13.11	2.24	碧玉	緑色	両面
裁9-18	6.48	20.65	2.53	碧玉	暗緑色	両面
裁9-19	6.91	15.31	2.75	碧玉	暗緑色	両面
裁9-20	5.80	14.63	2.86	碧玉	暗緑色	両面

表8 裁10管玉計測表

番号	外径(mm)	長さ(mm)	内径(mm)	材質	色調	穿孔方法
裁10-01	5.14	12.67	2.61	碧玉	濃緑色	両面
裁10-02	5.98	11.40	3.50	碧玉	濃緑色	両面
裁10-03	5.32	12.26	3.03	碧玉	濃緑色	両面
裁10-04	6.51	28.06	2.12	碧玉	緑色	両面
裁10-05	8.13	25.68	2.35	碧玉	緑色	両面
裁10-06	6.89	22.39	1.91	碧玉	緑色	両面
裁10-07	6.87	22.88	2.38	碧玉	緑色	両面
裁10-08	6.54	28.23	2.50	碧玉	緑色	両面
裁10-09	7.96	27.09	2.31	碧玉	緑色	両面

表9 裁11棗玉計測表

番号	上端径(mm)	下端径(mm)	最大径(mm)	高(mm)	材質	色調
裁11-01	3.90	3.61	6.12	11.63	滑石	淡灰ないし灰褐色
裁11-02	3.94	3.87	5.27	10.60	滑石	灰褐色
裁11-03	3.73	3.85	5.79	10.32	滑石	淡灰色
裁11-04	3.85	3.66	5.82	11.27	滑石	灰褐色
裁11-05	3.92	3.82	5.43	11.35	滑石	灰褐色
裁11-06	3.60	3.57	4.73	10.43	滑石	淡灰色
裁11-07	3.64	3.58	4.98	11.38	滑石	淡灰色
裁11-08	3.37	3.70	5.15	10.00	滑石	淡灰色
裁11-09	3.82	3.60	5.51	11.26	滑石	灰褐色
裁11-10	4.01	3.81	5.25	10.79	滑石	灰褐色
裁11-11	3.85	3.88	5.13	12.23	滑石	灰褐色
裁11-12	3.44	3.52	4.89	10.08	滑石	暗灰色
裁11-13	3.73	3.97	5.53	11.91	滑石	淡灰色
裁11-14	3.80	4.07	5.71	8.16	滑石	灰褐色
裁11-15	3.44	3.46	5.19	9.25	滑石	灰褐色
裁11-16	3.74	3.76	5.42	10.53	滑石	灰褐色
裁11-17	3.28	3.46	5.13	9.81	滑石	灰褐色
裁11-18	3.63	3.61	4.96	11.42	滑石	灰褐色
裁11-19	3.79	3.95	5.41	10.93	滑石	淡灰色
裁11-20	3.49	3.33	4.69	9.70	滑石	淡灰色
裁11-21	3.51	3.06	5.19	7.39	滑石	白ないし暗緑色
裁11-22	3.65	3.54	4.77	10.85	滑石	淡灰色
裁11-23	3.38	3.43	4.63	10.84	滑石	灰褐色
裁11-24	3.61	3.69	5.20	10.80	滑石	暗灰色
裁11-25	3.67	3.48	5.33	11.23	滑石	灰褐色
裁11-26	3.62	3.42	5.78	9.90	滑石	淡灰色
裁11-27	3.51	3.58	5.01	8.97	滑石	灰褐色
裁11-28	4.04	4.02	5.89	9.10	滑石	灰褐色
裁11-29	3.60	3.82	5.84	11.30	滑石	淡灰色
裁11-30	3.53	3.64	4.54	9.30	滑石	淡灰色
裁11-31	3.67	3.60	5.03	11.05	滑石	灰褐色
裁11-32	3.47	3.42	4.80	12.48	滑石	灰褐色
裁11-33	3.73	3.42	5.21	11.48	滑石	灰褐色ないし暗灰色
裁11-34	3.83	3.59	5.36	7.98	滑石	白ないし暗緑色
裁11-35	3.86	3.67	5.92	10.25	滑石	淡灰色
裁11-36	3.57	3.87	5.36	11.03	滑石	淡灰色
裁11-37	3.44	3.97	6.24	12.49	滑石	暗灰ないし灰褐色

3 玉 類

番号	上端径 (mm)	下端径 (mm)	最大径 (mm)	高 (mm)	材質	色調
裁 11-38	3.77	3.40	5.13	10.99	滑石	淡灰色
裁 11-39	3.63	3.53	5.37	9.02	滑石	白に灰褐色混じる
裁 11-40	3.65	3.54	4.72	11.07	滑石	淡灰色
裁 11-41	3.81	3.83	5.97	10.75	滑石	淡灰色
裁 11-42	3.91	3.91	5.73	9.55	滑石	白に暗灰色混じる
裁 11-43	3.93	3.87	6.07	10.95	滑石	灰褐色
裁 11-44	3.58	3.56	4.91	11.61	滑石	淡灰色
裁 11-45	3.60	3.64	5.23	11.25	滑石	淡灰色
裁 11-46	3.88	3.95	5.32	11.40	滑石	淡灰色
裁 11-47	3.46	3.62	4.65	10.70	滑石	暗灰色
裁 11-48	3.86	3.93	5.47	10.19	滑石	灰褐色
裁 11-49	3.23	3.37	4.92	11.34	滑石	灰褐色
裁 11-50	3.90	3.72	5.59	11.82	滑石	灰褐色
裁 11-51	3.64	3.57	4.97	10.76	滑石	淡灰色
裁 11-52	3.78	3.93	5.23	9.90	滑石	淡灰色
裁 11-53	3.93	3.52	5.83	12.61	滑石	淡灰色
裁 11-54	3.62	—	4.85	10.31	滑石	淡灰色
裁 11-55	4.07	3.38	5.39	11.70	滑石	淡灰色
裁 11-56	3.45	3.46	4.82	11.92	滑石	淡灰色
裁 11-57	3.86	3.80	6.25	11.99	滑石	淡灰色
裁 11-58	4.16	3.84	6.13	11.34	滑石	淡灰色
裁 11-59	3.87	3.62	5.96	10.19	滑石	灰褐色
裁 11-60	3.35	3.61	4.81	10.99	滑石	淡灰色
裁 11-61	3.74	3.37	5.18	9.60	滑石	灰褐色
裁 11-62	3.71	3.43	5.05	11.53	滑石	灰褐色
裁 11-63	3.13	3.57	4.92	11.97	滑石	暗灰色ないし灰褐色
裁 11-64	3.53	3.77	5.34	11.29	滑石	灰褐色
裁 11-65	3.83	3.62	6.12	9.94	滑石	灰褐色
裁 11-66	3.72	3.60	5.25	10.72	滑石	灰褐色
裁 11-67	3.66	3.33	4.95	11.30	滑石	淡灰色に暗灰色混じる
裁 11-68	3.37	3.44	5.24	9.85	滑石	灰褐色
裁 11-69	3.90	3.85	5.96	11.33	滑石	灰褐色
裁 11-70	3.33	3.47	4.81	10.52	滑石	灰褐色
裁 11-71	3.73	—	5.34	7.92	滑石	白色
裁 11-72	3.65	3.69	4.99	10.27	滑石	灰褐色
裁 11-73	3.42	3.60	5.73	10.52	滑石	灰褐色
裁 11-74	3.71	3.54	5.67	9.56	滑石	灰褐色
裁 11-75	3.34	3.35	4.84	12.91	滑石	灰褐色
裁 11-76	3.82	3.80	5.61	10.69	滑石	淡灰色
裁 11-77	3.93	3.79	6.01	9.85	滑石	淡灰色
裁 11-78	3.75	3.80	5.24	8.94	滑石	白に暗灰色混じる
裁 11-79	3.89	3.96	5.33	8.09	滑石	白に暗灰色混じる
裁 11-80	3.92	3.77	5.83	11.10	滑石	淡灰色
裁 11-81	3.53	3.58	4.75	10.24	滑石	淡灰色
裁 11-82	3.68	3.49	5.28	9.20	滑石	淡灰色

表10 裁12棗玉計測表

番号	下端径 (mm)	上端径 (mm)	最大径 (mm)	高 (mm)	材質	色調
裁12	3.33	3.17	4.57	7.36	滑石	白色

表11 裁7ガラス管玉計測表

番号	外径 (mm)	高 (mm)	孔径 (mm)	色調
裁7-01	6.00	9.08	2.89	青水色

表12 裁12ガラス小玉計測表

番号	外径 (mm)	高 (mm)	色調	番号	外径 (mm)	高 (mm)	色調
裁12-01	5.83	4.72	青水色	裁12-39	5.91	4.75	青水色
裁12-02	6.51	4.16	青水色	裁12-40	6.46	5.93	青水色
裁12-03	6.87	4.67	青水色	裁12-41	6.23	5.14	青水色
裁12-04	6.26	4.32	青水色	裁12-42	6.31	4.53	青水色
裁12-05	6.08	6.66	青水色	裁12-43	6.46	4.85	青水色
裁12-06	5.80	4.63	青水色	裁12-44	6.43	4.53	青水色
裁12-07	6.94	4.39	青水色	裁12-45	3.96	3.07	青水色
裁12-08	5.81	4.56	青水色	裁12-46	4.42	2.85	青水色
裁12-09	7.09	4.78	青水色	裁12-47	3.99	2.57	青水色
裁12-10	6.24	4.81	青水色	裁12-48	4.04	3.32	青水色
裁12-11	6.02	5.16	青水色	裁12-49	4.11	3.02	青水色
裁12-12	6.82	4.06	青水色	裁12-50	4.26	3.35	青水色
裁12-13	7.72	4.55	青水色	裁12-51	4.40	3.23	青水色
裁12-14	5.61	5.32	青水色	裁12-52	4.00	3.02	青水色
裁12-15	5.65	4.77	青水色	裁12-53	5.10	2.98	青水色
裁12-16	6.91	4.45	青水色	裁12-54	4.58	2.82	青水色
裁12-17	6.30	4.14	青水色	裁12-55	4.25	3.51	青水色
裁12-18	6.71	3.95	青水色	裁12-56	4.32	2.65	青水色
裁12-19	6.45	4.42	青水色	裁12-57	4.30	2.83	青水色
裁12-20	7.03	3.80	青水色	裁12-58	3.66	3.06	青水色
裁12-21	6.63	4.82	青水色	裁12-59	4.80	3.02	青水色
裁12-22	6.63	5.03	青水色	裁12-60	4.99	2.85	青水色
裁12-23	6.59	5.00	青水色	裁12-61	4.37	3.01	青水色
裁12-24	6.33	4.44	青水色	裁12-62	4.15	2.99	青水色
裁12-25	5.88	4.43	青水色	裁12-63	4.50	3.16	青水色
裁12-26	6.43	4.17	青水色	裁12-64	3.56	2.56	青水色
裁12-27	6.91	4.80	青水色	裁12-65	3.19	3.43	青水色
裁12-28	6.91	4.84	青水色	裁12-66	4.17	2.79	青水色
裁12-29	6.28	5.03	青水色	裁12-67	4.55	3.06	青水色
裁12-30	6.29	5.55	青水色	裁12-68	4.12	2.77	青水色
裁12-31	6.15	3.29	青水色	裁12-69	4.21	3.25	青水色
裁12-32	6.36	4.29	青水色	裁12-70	3.56	2.74	青水色
裁12-33	6.36	6.97	青水色	裁12-71	3.93	2.12	青水色
裁12-34	6.08	5.26	青水色	裁12-72	3.37	2.34	青水色
裁12-35	6.46	4.28	青水色	裁12-73	3.37	2.51	青水色
裁12-36	6.25	4.92	青水色	裁12-74	4.14	2.52	青水色
裁12-37	6.88	4.09	青水色	裁12-75	3.50	3.45	青水色
裁12-38	6.53	4.78	青水色	裁12-76	4.23	3.39	青水色

3 玉 類

番号	外径(mm)	高(mm)	色調	番号	外径(mm)	高(mm)	色調
裁12-77	4.58	3.36	青水色	裁12-129	4.67	3.38	青水色
裁12-78	4.20	2.46	青水色	裁12-130	4.33	2.98	青水色
裁12-79	4.27	3.21	青水色	裁12-131	4.37	2.57	青水色
裁12-80	3.78	3.27	青水色	裁12-132	4.16	3.09	青水色
裁12-81	3.89	3.08	青水色	裁12-133	3.37	2.53	青水色
裁12-82	3.82	3.18	青水色	裁12-134	3.47	2.92	青水色
裁12-83	4.46	2.26	青水色	裁12-135	3.55	2.07	青水色
裁12-84	3.60	2.90	青水色	裁12-136	4.28	2.25	青水色
裁12-85	3.33	3.13	青水色	裁12-137	4.33	3.48	青水色
裁12-86	3.24	3.11	青水色	裁12-138	3.41	2.41	青水色
裁12-87	3.18	2.61	青水色	裁12-139	4.18	2.51	青水色
裁12-88	3.89	2.77	青水色	裁12-140	4.41	2.40	青水色
裁12-89	4.21	3.40	青水色	裁12-141	4.74	2.39	青水色
裁12-90	4.80	3.54	青水色	裁12-142	3.68	2.61	青水色
裁12-91	4.98	2.58	青水色	裁12-143	3.54	2.76	青水色
裁12-92	4.11	2.33	青水色	裁12-144	3.54	3.15	青水色
裁12-93	4.11	2.28	青水色	裁12-145	3.72	3.30	青水色
裁12-94	4.14	3.49	青水色	裁12-146	3.85	2.96	青水色
裁12-95	3.84	2.89	青水色	裁12-147	3.37	2.76	青水色
裁12-96	4.26	2.53	青水色	裁12-148	4.08	2.20	青水色
裁12-97	4.09	2.67	青水色	裁12-149	3.71	1.92	青水色
裁12-98	4.25	1.96	青水色	裁12-150	3.90	1.97	青水色
裁12-99	4.15	2.46	青水色	裁12-151	3.60	2.30	青水色
裁12-100	4.35	2.38	青水色	裁12-152	3.44	2.39	青水色
裁12-101	4.32	2.51	青水色	裁12-153	4.32	2.00	青水色
裁12-102	4.25	2.62	青水色	裁12-154	3.54	2.29	青水色
裁12-103	3.46	2.93	青水色	裁12-155	4.25	2.90	青水色
裁12-104	3.83	3.09	青水色	裁12-156	3.66	2.49	青水色
裁12-105	3.66	2.62	青水色	裁12-157	4.02	3.17	青水色
裁12-106	3.36	2.87	青水色	裁12-158	4.94	2.90	青水色
裁12-107	3.49	2.87	青水色	裁12-159	3.80	2.73	青水色
裁12-108	4.31	2.97	青水色	裁12-160	3.98	2.77	青水色
裁12-109	4.01	2.16	青水色	裁12-161	3.48	2.86	青水色
裁12-110	3.94	2.30	青水色	裁12-162	3.27	2.45	青水色
裁12-111	4.56	2.92	青水色	裁12-163	3.27	2.29	青水色
裁12-112	3.75	2.91	青水色	裁12-164	4.25	2.23	青水色
裁12-113	3.66	2.07	青水色	裁12-165	3.58	3.09	青水色
裁12-114	3.76	3.28	青水色	裁12-166	3.24	2.96	青水色
裁12-115	3.63	2.44	青水色	裁12-167	3.42	2.51	青水色
裁12-116	4.18	2.67	青水色	裁12-168	3.75	2.03	青水色
裁12-117	4.18	3.06	青水色	裁12-169	3.48	2.58	青水色
裁12-118	3.47	3.08	青水色	裁12-170	3.92	2.49	青水色
裁12-119	3.03	3.07	青水色	裁12-171	4.38	1.98	青水色
裁12-120	4.17	2.54	青水色	裁12-172	4.55	2.26	青水色
裁12-121	3.94	3.15	青水色	裁12-173	4.45	2.35	青水色
裁12-122	3.36	2.60	青水色	裁12-174	4.03	2.58	青水色
裁12-123	3.43	2.66	青水色	裁12-175	3.75	2.55	青水色
裁12-124	3.50	2.26	青水色	裁12-176	3.84	1.89	青水色
裁12-125	3.97	2.61	青水色	裁12-177	3.40	2.39	青水色
裁12-126	3.23	3.04	青水色	裁12-178	3.77	2.50	青水色
裁12-127	4.01	2.37	青水色	裁12-179	3.56	2.56	青水色
裁12-128	3.42	3.40	青水色	裁12-180	3.42	2.20	青水色

番号	外径(mm)	高(mm)	色調	番号	外径(mm)	高(mm)	色調
裁12-181	3.63	2.54	青水色	裁12-191	4.12	2.36	青水色
裁12-182	3.41	2.39	青水色	裁12-192	3.30	2.59	青水色
裁12-183	4.19	2.98	青水色	裁12-193	3.94	2.23	青水色
裁12-184	4.13	2.15	青水色	裁12-194	3.93	2.89	青水色
裁12-185	4.33	1.66	青水色	裁12-195	3.81	2.21	青水色
裁12-186	4.62	2.64	青水色	裁12-196	3.95	2.51	青水色
裁12-187	3.30	2.53	青水色	裁12-197	3.13	2.20	青水色
裁12-188	3.48	3.50	青水色	裁12-198	3.09	3.25	青水色
裁12-189	3.98	2.56	青水色	裁12-199	3.20	2.44	青水色
裁12-190	3.78	2.17	青水色				

表13 裁13ガラス小玉計測表

番号	外径(mm)	高(mm)	色調
裁13-01	8.03	6.69	藍色
裁13-02	10.56	5.13	藍色

表14 裁14ガラス小玉計測表

番号	外径(mm)	高(mm)	色調
裁14-01	3.72	3.85	緑青色
裁14-02	4.50	2.88	緑青色
裁14-03	5.60	2.43	緑青色
裁14-04	4.72	3.40	青水色
裁14-05	3.88	2.08	水色
裁14-06	3.45	2.21	水色
裁14-07	4.08	2.70	水色
裁14-08	3.67	1.95	水色
裁14-09	4.30	3.32	水色
裁14-10	4.30	2.44	水色
裁14-11	4.29	3.32	水色
裁14-12	4.55	3.78	水色
裁14-13	4.28	2.76	水色
裁14-14	3.75	2.47	水色
裁14-15	3.95	2.11	水色
裁14-16	3.81	2.48	水色
裁14-17	3.91	2.17	水色
裁14-18	3.78	2.53	水色
裁14-19	3.84	2.68	水色
裁14-20	4.20	2.46	水色

表15 裁15ガラス小玉計測表

番号	外径(mm)	高(mm)	色調
裁15-01	5.41	3.33	藍色
裁15-02	4.71	3.46	藍色
裁15-03	4.35	2.56	藍色
裁15-04	4.67	2.62	藍色
裁15-05	4.50	2.85	藍色
裁15-06	4.29	3.43	藍色
裁15-07	4.06	3.17	藍色
裁15-08	4.52	2.80	藍色
裁15-09	3.63	2.76	藍色
裁15-10	4.10	2.03	藍色
裁15-11	5.43	3.45	水色
裁15-12	4.96	3.66	水色
裁15-13	3.78	2.53	水色
裁15-14	4.28	3.03	水色
裁15-15	3.95	1.96	水色
裁15-16	3.26	2.86	水色
裁15-17	3.42	1.32	水色
裁15-18	3.18	2.04	水色
裁15-19	4.00	3.81	水色

4 金属製品

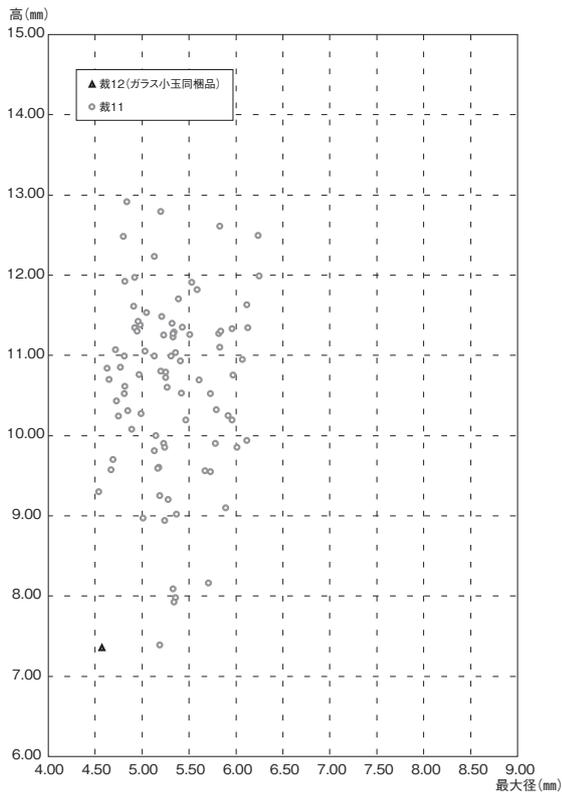


図28 稗玉法量分布図

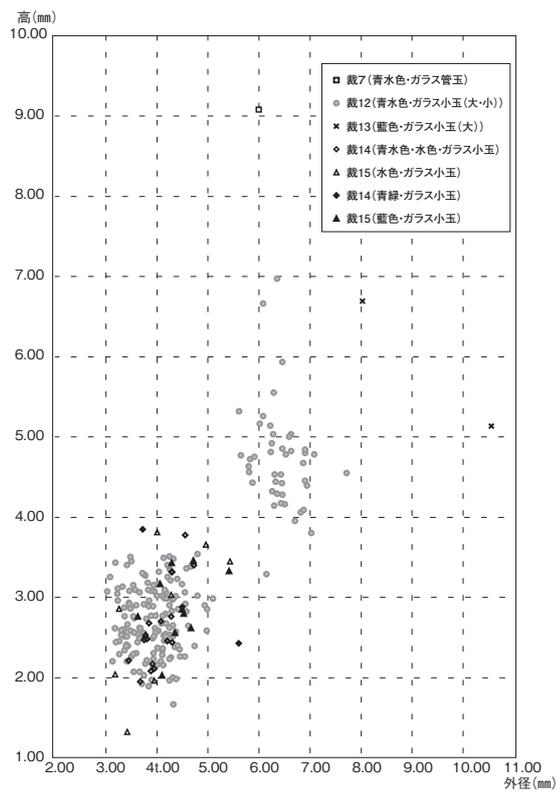


図29 ガラス玉法量分布図

巻き付け技法も混在している。

裁13

ガラス小玉2点である。1は外径8.03mm、高さ6.69mm。もう1点は10.56mm、高さ5.13mm。2点とも藍色を呈する。気泡が1直線上になっており、引き伸ばし切断技法であることがわかる。

裁14

ガラス小玉20点が保管されている。外径3.72～5.60mm、高さ1.95～3.85mm。緑青色3点、青水色1点、水色16点である。巻き付け技法と引き伸ばし技法が混在する。

裁15

ガラス小玉19点である。外径3.18～5.43mm、高さ1.32～3.81mm。藍色が10点、水色が9点である。巻き付け技法と引き伸ばし技法が混在する。(南部裕樹)

4 金属製品

1 耳環

裁16

耳環1点である。肉眼観察では純金製と判断される。当初の垂飾の有無は不明である。径1.25×1.35

cm。環は断面隅丸方形であり、太さ0.15cmである。

2 鉄 刀

鉄刀2振が登録番号外で保管されている。1は、残存長70.7cm、幅3.5cm、厚さ0.8cmの本体の他に、茎の破片1点がある。刀は2振のみであり、2の茎は完形である。茎の破片は、本体と接合はしないが、形状から見ても1の破片であると判断してよい。刃部は断面二等辺三角形で、直刀である。茎の目釘孔は2つある。佩表・佩裏に鞘・柄の木質が若干付着する。2は、残存長77.0cm、刃部最大幅3.9cm、厚さ0.9cm。刃部は、断面二等辺三角形で若干内反りしている。茎は刃上がり栗尻であり、目釘孔は2つある。佩表・佩裏に鞘・柄の木質が残る。

(南部)

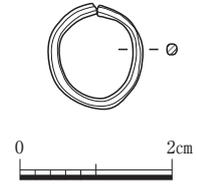


図30 裁13 耳環 (1 : 1)



图31 鉄刀 (1 : 4)

北和城南古墳出土品調査報告書

発行年月日：平成29年3月31日

発行：奈良国立博物館

〒630-8213 奈良市登大路町50番地

印刷：能登印刷株式会社

〒924-0013 白山市番匠町293番地